

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
設立10周年記念誌

Challenge for the Next 10



スポーツ振興を通して、チャレンジすることの尊さを社会へ。



公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
設立 10 周年記念誌

Challenge for the Next 10

ご挨拶 公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 理事長 木村 隆昭 05

チャレンジのあゆみ(1) 平成19年度～平成23年度 06

事務局長の回想 岸川 善次郎 17

10周年記念座談会 浅見 俊雄 × 小島 智子 × 長谷川 至 18

特別寄稿 岡崎 助一 / 工藤 和男 / 柳 敏晴 / 中森 邦男 / 伊坂 忠夫 / 柳 弘之 22

チャレンジのあゆみ(2) 平成24年度～平成28年度 28

事務局長の回想 杉本 典彦 39

事業推進体制一覧 40

数字で見るYMFSの10年 44

エピソード 大庭 義隆 45



原点を大切に。よりアクティブに。 次の10年にアプローチ。

早いもので財団の設立から丸10年の月日が経ちました。この間、多くの皆様のご賛同・ご支援をいただきましたことに、あらためて御礼を申し上げます。

この10年は、スポーツ振興に向けたスポーツ基本法の施行や、その具体的な推進のためのスポーツ基本計画、また東京2020オリンピック・パラリンピックの開催決定、さらにはスポーツ行政の一元化を目指したスポーツ庁の設置など、日本のスポーツ界にとって大きな変革期にありました。

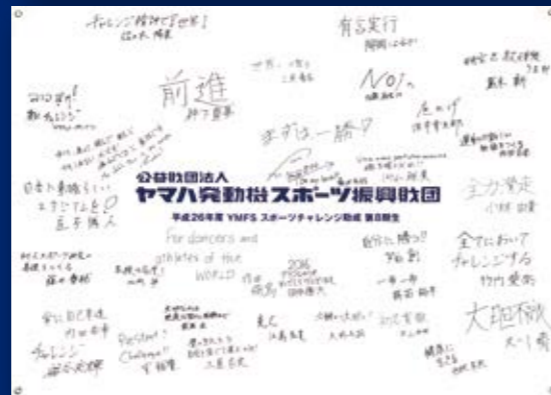
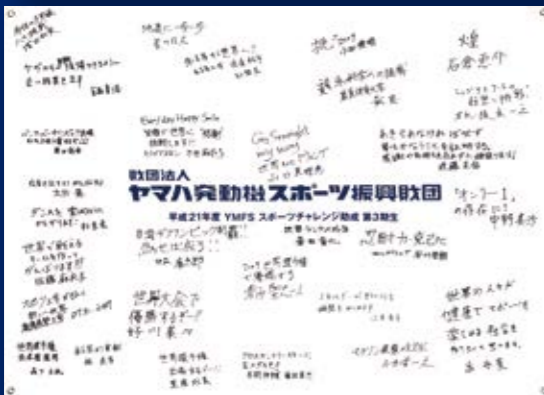
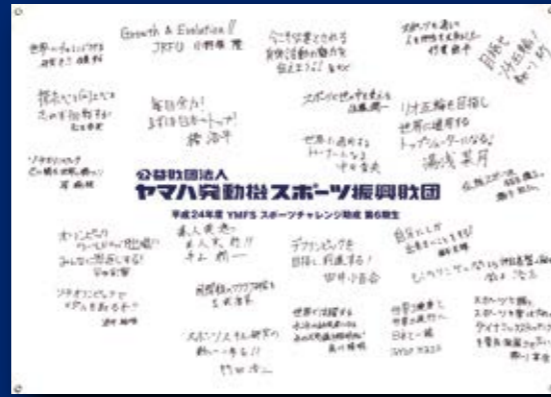
平成18年11月に設立した当財団は、設立にあたり、「スポーツを通じて夢の実現にチャレンジする人を応援する」というビジョンを定めました。競技レベルや分野、選手や指導者、研究者といった立場にかかわらず、夢を抱き、高い目標を持って、それを乗り越えるために情熱を燃やすその「心」を応援したいと考えたのです。ある競技で、誰も成しえなかった記録をつくる。その偉業と同じように、「挑戦する心」そのものもまた極めて尊く、価値のあるものであると私たちは考えています。

私たちはこの原点を大切に、スポーツ振興を通して挑戦する姿勢が共感・称賛される、人と社会づくりを目指して活動しています。こうしたビジョンの下に推進している各事業も、皆様に支えられながら特徴ある活動に育ってまいりました。たとえばチャレンジ助成事業においては、延べ301名のチャレンジャーを支援し、オリンピックやパラリンピック等で活躍するアスリートをはじめ、スポーツ振興に貢献する研究者も活躍を見せてくれています。また、前身の日本マリンスポーツ普及教育振興財団からの継承事業であるジュニアヨットスクール葉山は来年で40年、水辺の風景画コンテストは30年の節目を迎えます。さらに、スポーツ振興に関わる縁の下の力持ちを表彰するスポーツチャレンジ賞、障害者スポーツの振興から始めた調査研究活動等も、その活動基盤を着実に固めてまいりました。

今後につきましても、民間企業を母体とする公益財団法人として、持続的、安定的な事業推進を念頭に置きながら、常に社会のニーズや課題を踏まえ、オリジナリティを大切に、よりアクティブな姿勢でスポーツ振興にアプローチしてまいりたいと考えています。皆様には変わらぬご支援をよろしくお願い申し上げます。



公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団
理事長 木村 隆昭



チャレンジのあゆみ 平成19年度 ▶ 23年度

平成23年度 (2011/2012)

- スポーツ基本法制定・交付
- 地上デジタル放送に移行
- 第7回アジア冬季競技大会(アスタナ)
- 第6回FIFA女子ワールドカップ(スウェーデン)で日本が優勝

● YMFSのネットワークを活かした被災地復興支援活動を展開

平成22年度 (2010/2011)

- 東日本大震災が発生
- 小惑星探査機はやぶさが地球に帰還
- 第21回オリンピック冬季競技大会(バンクーバー)
- 第10回パラリンピック冬季競技大会(バンクーバー)
- 第16回アジア競技大会(広州)
- 第19回FIFAワールドカップ(南アフリカ)で日本がベスト16

● 東日本大震災の発生によりスポーツ・チャレンジーズ・ミーティングを中止

● 第2代理事長に木村隆昭が就任

平成21年度 (2009/2010)

- 衆院選で民主党が過半数を獲得し政権が交代
- 裁判員制度がスタート
- 第5回東アジア競技大会(香港)
- 第21回夏季デフリンピック(台北)

● 新たな公益法人法のもと、公益財団法人の認可(第1号)を受ける

● スポーツ・チャレンジ・ウィークの会場を静岡・つま恋に移して開催

平成20年度 (2008/2009)

- 第44代アメリカ大統領にバラク・オバマ氏が就任
- アメリカ・リーマンブラザースが破綻
- 第29回オリンピック競技大会(北京)
- 第13回パラリンピック競技大会(北京)
- 公益財団法人認定に向けて申請
- ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞を制定

平成19年度 (2007/2008)

- アメリカ・サブプライムローンに端を発し、金融不安が世界に広がる
- 日本郵政グループがスタート
- 新潟県中越沖地震が発生
- 第6回アジア冬季競技大会(長春)
- 第16回冬季デフリンピック(ソルトレイクシティ)
- 文部科学省に新財団の設立を申請(2006年)
- 伊吹文明文部科学大臣から設立認可を受けて新財団を設立(2006年)
- 初代理事長に長谷川至が就任
- 日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)を統合



2011年の近代五種アジア選手権で6位に入り、悲願のオリンピック出場を決めた黒須成美選手(体験3期生)。喜びの涙を拭くと、震災の復興に向き合う被災地の人々にメッセージを贈った

「チャレンジ」というキーワードを導き出し、組織と事業の基盤を固めた「ひとまわりめ」

創立50周年事業の一つとして 2006年11月、新財団を設立

2005年、ヤマハ発動機株式会社は創立50周年を迎えた。その記念事業の一つとして、社会への感謝の気持ちを込めた財団の設立が検討された。その年の暮れ、財団設立プロジェクトのリーダーが新財団の素案を抱えて当時の社長のもとを訪ねると、ひと言、こんな要望が返ってきた。

——「ヤマハらしい財団を期待します」

ヤマハ発動機の創立は1955年7月1日。当時国内には200社近い二輪車メーカーが林立し、ヤマハはその最後発として二輪車業界に参入した。そして最後発のメーカーが自らの存在のアピールに使ったのは、当時の二輪車イベントとしては国内最大級だった「富士登山レース」への挑戦だった。7月10日、会社の登記からわずか9日後に開かれたそのレースで優勝を飾ったヤマハは、勝つことで自社製品の性能と信頼性を証明し、そのアピールによって市場に基盤を築いていった。その後もボートやヨット、スノーモビルなど、新たな事業を起こすたびにレースの世界に飛び込んでいった。

事業に直結するモータースポーツやマリンスポーツの世界ばかりではない。ジュビロ磐田の前身であるヤマハ発動機サッカー部、ジャパンラグビートップリーグで活躍するヤマハ発動機ジュビロなど、事業を超えた領域でもスポーツは常に社員にとって身近な存在だった。「スポーツ」そして「チャレンジ」というキーワードは、ヤマハ発動機という会社の企業人格の一部として浸透していた。

「とは言え、スポーツ界についてはほぼ素人。知識もネットワークも心許ない中で、私たちが勇気づけたのは協力を仰いだ浅見(俊雄)先生の快諾だった」(岸川善次郎事務局長/当時)。「未来を担う若者たちにチャンスを提供して、世界に羽ばたく人材の育成に寄与したい」「自己の夢や目標にチャレンジする人たちを応援したい」という設立コンセプトが、教育者としての浅見氏の考えに符合し、共感を得ることに成功した。

浅見氏の後押しを得ながら、急ピッチで組織体制が固められ、翌2006年9月27日には財団設立発起人会の開催に漕ぎつけた。10月12日には文部科学省に設立申請を行い、11月20日、伊吹文明文部科学大臣から設立認可を受けて財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)が設立された。理事長には長谷川至氏が就任した。



スポーツチャレンジ助成の第1期生を迎えた初めての助成金贈呈式。山本篤選手らが名を連ねた



JMPFの活動を引き継ぐなど 基軸となる事業を徐々に拡充

設立許可が下りると同時に、かねてから準備を進めてきたスポーツチャレンジ助成や、スポーツ教材提供の募集を開始した。助成事業に関しては「豊かで安定した日本は、その反面、若者がチャレンジ精神を抱きにくい環境にあるのではないか」「ルールから外れることを良しとしない風土からは、型破りな人材は現れにくいのではないか」という考えから、求める人物像をノビシロのある情熱的な若い人材に据えた。背景には、各競技の有望選手には、すでに既存のスポーツ団体等から手厚い支援が行われていることもあった。

初めての募集活動は不安を抱いてのスタートだったが、結果、想定を大きく上回る191件の応募申請があった。やがて書類審査会と面接を経て第1期生34件を決定した。その中には、リオパラリンピックで2つのメダルを獲得した山本篤選手（走幅跳）や、後に体験助成の審査委員として名を連ねる小島智子氏（チャイレーディング）も含まれていた。事務局はできる限りチャレンジャーたちのもとに足を運び、トレーニングや大会、また研究室や実験の場でどん欲にスポーツ現場のリアルを身に着けよう取り組んだ。

翌2007年9月には、日本マリンスポーツ普及教育振興財団（JMPF）を統合し、ジュニアヨットスクールや水辺の風景画コンテストといった歴史のある事業を引き継いだ。設立企画段階での計画は概ね予定通りに進んでいたが、ただ一点、表彰制度だけは「らしさ」を持ったコンセプトを生み出すには至らず、初年度の事業活動に組み込むことができなかった。

「縁の下の力持ち」というキーワードは、現場を歩き、そこにいる人々と会話を重ねる中から浮かび上がった。一人のトップ選手が生まれる背景には、数えきれないほどの「縁の下の力持ち」が存在する。トップスポーツだけではなく、全国には無私の精神で子どもたちにスポーツの楽しさを伝え、育み鍛えようとしている人たちが大勢いる。さらに、その子どもたちがいきいきとスポーツを楽しむための用具や施設、運営などに携わる縁の下の力持ちを加えたらその何倍もいるだろう。そうした、スポーツを支えるすべての縁の下の力持ちたちへの敬意を込めて、その代表となるような人物を探しだし、スポットライトを当てようというコンセプトが生み出されていった。

縁の下の力持ちを讃える スポーツチャレンジ賞を制定

縁の下の力持ち——。各方面に候補者推薦のお願いをした中から、初の功労賞には旭川南高校柔道部監督・中野政美氏（北海道新聞推薦）を、また奨励賞には車いすテニスコーチの丸山弘道氏（日本障がい者スポーツ協会推薦）を選出した。中野氏は40年にわたる高校柔道指導歴の中で、アテネ、北京の両オリンピックで2大会連続の金メダルを獲得した上野雅恵選手をはじめ、世界レベルで活躍する多数のトップ選手を輩出した名伯楽。長期的な視点による育成を実践し、地域のユース世代から国内トップレベルへの橋渡し役を担ってきた人物だった。一方の丸山氏もまだ確立されていなかった車いすテニス指導の分野で、国枝慎吾選手らのコーチとして活躍し、北京パラリンピックにおいて

- ① 会場をヤマハリゾートつま恋（静岡）に移して開かれた第3回スポーツ・チャレンジ・ウィーク（現YSCM）。当時は5日間にわたって開かれ、第9回YSCMまでつま恋会場で開催された
- ② 第1回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞功労賞の受賞者、高校柔道指導者の中野政美氏は、地域のユース年代とトップスポーツの橋渡し役を担った名伯楽
- ③ JMPFから引き継いだジュニアヨットスクール葉山。そのカリキュラムを拡充し、平成22年度には伊豆大島への外洋帆船訓練にチャレンジした
- ④ 体験1・2期生の岡本達也選手は「プロ選手への復帰」を目標に掲げ、大学卒業後、水戸ホーリーホックへの入団を実現した
- ⑤ 水辺の風景画コンテスト。子どもたちが水辺に出かける機会を増やしたいという考えから、水辺体験に取り組む地域の小学校などを訪問し、その活動のレポートを開始
- ⑥ 第4回スポーツチャレンジ賞を受賞した岸本健氏と水谷卓人氏（ともにスポーツ写真家）の作品展を実施
- ⑦ 第96回日本選手権で日本新記録の4m40を跳び、ロンドンオリンピック出場を決めた我孫子智美選手（体験5期生）
- ⑧ コピーライターであり、マジシャンでもある内田伸哉氏を招いて行われた第5回YSCMの特別講演。異分野から知識や発想を学ぶための試みだった

清水 聖志人 しみず・せしと

スポーツチャレンジ体験助成第3期生

チャレンジ目標は達成できなかったが、「成長の機会」と「仲間」を得た



この度は、ヤマハ発動機スポーツ振興財団設立10周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。

私はスポーツチャレンジ体験助成第3期生として「2009年レスリング世界選手権での金メダル獲得」をテーマに採択いただき、アスリート最後の挑戦と位置付けて目標達成を目指しました。残念ながら目標を果たすことはできなかったものの、浅見俊雄先生をはじめYMFSのご支援により成長の機会と素晴らしい仲間を得ることができました。

第3期の永見智行先生（北里大学講師）、第4期の島本好平先生（明星大学准教授）との出会いもその一つです。お二人とは様々な共同研究に加え、当時私が担当していたレスリング競技者の発掘・育成システム構築事業にて科学サポートや教育プログラム開発へ共同参加いただき、2016年リオデジャネイロ五輪のメダル獲得につなげることが出来ました。

助成期間中にアスリートとしての目標を果たせなかったことに悔しさが残りますが、YMFSのご支援により引退後のキャリアを後押しいただいたことに感謝しかありません。まだまだ道半ばではありますが、YMFSを通して学んだチャレンジスピリットを忘れず今後の研究活動及びアスリートの育成等の活動に邁進していきたいと考えております。

は国枝選手の個人金メダル、ダブルス銅メダル(国枝選手/斎田悟司選手)の獲得になくてはならない存在となった。

縁の下の力持ちへの表彰は、関係者に驚きを持って迎えられた。中野氏は「連絡をいただいた時は、ドッキリ番組ではないかと思った」と語り、丸山氏も「本当に私でいいんでしょうか?」と戸惑いを見せた。そして揃って「頑張っているのは選手。私は裏方ですから」とまったく同じことを口にした。一方、丸山氏の推薦団体であるJPSAの担当者は「丸山コーチの献身的な活動には日頃から協会も感謝している。その丸山コーチにスポットが当たり、広く皆さんに存在を知っていただけることが嬉しい」と喜んだ。表彰式に駆けつけた国枝選手も「自分は結果を出せばメダルをもらえる。でもコーチにはメダルがない。自分自身、丸山コーチのような人に何かできないだろうか」と普段から考えていた。そして今日、こうして実現した」と笑顔でスピーチした。

財団の設立から1年遅れでスタートしたスポーツチャレンジ賞。コンセプトワーク、候補者探しと苦勞に苦勞を重ねてきただけに、国枝選手のコメント聞いた岸川事務局長は「思わず目に熱いものがこみ上げた」と振り返った。

さらなる質の向上に向け 中期事業方針「Next 5」を策定

助成事業を重ねていく中で、チャレンジャーたちも少しずつ目に見える成果を生み出し始めていた。2008年北京パラリンピック、2009年台北デフリンピックで体験チャレンジャーが躍動すると

もに、研究チャレンジャーによる論文採択や受賞の報せも年毎に増えていった。同時にPDCAサイクルによってチャレンジャーの成長を促すために、中間報告会を開くなど「しつこい(質濃い)」サポート体制を充実させていった。また、ジュニアヨットスクールでは海洋先進国の水辺教育を参考にした新たなプログラムを組み込むなど、各事業において制度や活動のブラッシュアップが進められていった。2009年には公益財団法人への移行が認定され、公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団として、新たな気持ちで第二のスタートを踏み出した。

そうした中、2011年3月11日に東日本大震災が発生。甚大な被害をもたらした未曾有の大災害により日本はかつてない混乱に陥った。もちろんその3日後に予定されていた第4回スポーツチャレンジャーズミーティングは中止された。一方、復旧・復興に向けてのスポーツ界の動きは早く、その絆は驚くほどのスピードで広がっていった。YMFSでもスポーツ教材の提供と合わせ、被災地の学校や避難所に画材やスポーツ用品を届けた。また、津波の被害を受けた被災地のジュニアセーラーに向けて、セーリング大会出場への優遇措置を取るとともに、葉山スクールの夏合宿に東北のセーラーを招待するなどの取り組みを行った。

財団の設立から丸5年——。ゼロからの企画であった各事業はどうか軌道に乗り、その質を問う段階に入った。そして平成24年度から始まる次なる5年について、①新たな価値づくり、②事業の「質」向上、③各事業のシナジー強化を軸とする中期事業方針「Next 5」を策定した。

湯原 浩一 ゆはら・こういち

YMFS ジュニアヨットスクール葉山
ヘッドコーチ

財団設立10周年、 おめでとうございます



私が初めてジュニアヨットスクール(当時はヤマハジュニアスクール)を訪れたときは、葉山マリーナにホテルや夏にクーミンのコンサートが開催されていたプールが併設されていた頃です。そのプールの脇に夏は更衣室になる建物があり、それを利用して教室を開催していました。通常は「海組」「風組」と二組に分かれて隔週で練習していましたが、夏の期間はプール営業のため使用できず、逗子海岸にあった旧国鉄海の家「逗子会館」で寝泊まりし、葉山マリーナまで走り、練習をしていました。いまだに逗子会館の夕食に出たタコの酢のものが忘れられません。

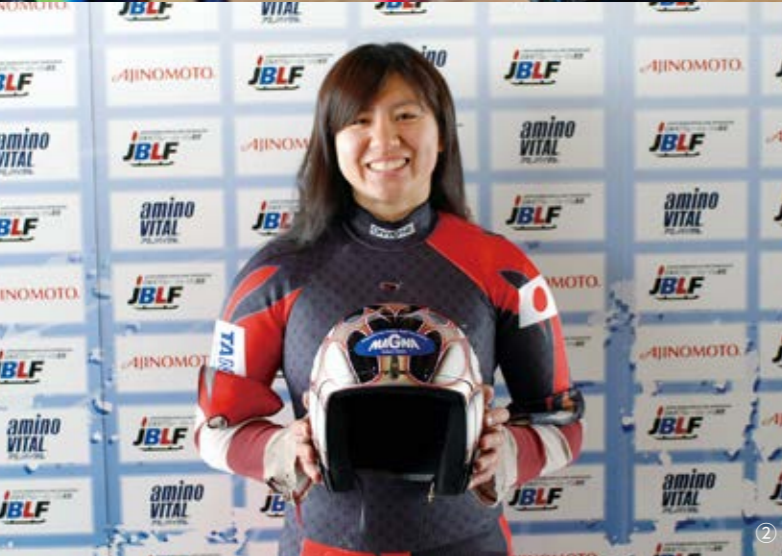
その後、教室は葉山マリーナの一角を借りたり、一時は森戸海岸の「珠屋」にヨット、教室とも移動したり、漁協の倉庫をお借りしたりと何度も移動して来ました。現在は葉山マリーナ内に教室があり、当時と比べるまでもなく、より良い環境であると思います。

多くの卒業生を輩出しましたが、初期の頃の生徒さんは、既に40歳を超える年齢となり、多方面で活躍されていたり、子育てに奮闘中の方がいたりさまざまですが、いずれの方もヨットスクールの経験が活かされていると確信しています。先日、とある方から卒業生の現在の写真を見せて頂きましたが、童顔の小学生だった方が3人のお子さんの父親となり見違えるほどの中年太りの姿に驚いたりもしました。

長年、このスクールに携わってまいりましたが、自然の中での活動のため、思い通りにいかないことが多く、最初は戸惑い、驚き、恐怖を感じていた生徒たちが、練習を重ねるにつれてたくましく成長していく姿は、学校、家庭や他の教育機関では得ることのできない貴重なものと思われま。このような環境で生徒たちは、自主・自立・創造する力を確実に身に付けています。また、年齢の異なる友達と一緒に行動することにより、協調性、コミュニケーション能力や思いやりの気持ちを育ててきました。いずれの能力も、現代社会において欠かすことのできない能力だと考えております。

最後に長年にわたり、事故もなくこのスクールの最大の目標である「安全第一」を守れてきたことは、保護者の皆様、マリーナ関係者、ヨットオーナーの皆様、コーチの方々のご協力のお蔭と深く感謝しております。

- ① アジアでたった一つのロンドンオリンピック出場枠を目指し、果敢にチャレンジしたカヌーシングルの鈴木康大選手(体験4・5期生)。しかし、そのチャレンジは実らなかった
- ② リュージュの原田窓香選手(体験2・3期生)はイタリアでの武者修行でバンクーバーオリンピックでの上位進出を目指した
- ③ 国内競技人口約50人のアイススレッジホッケー。第3回スポーツチャレンジ賞奨励賞を受賞したのは、その日本代表チームの監督としてバンクーバーパラリンピックで銀メダルを獲得した中北浩仁氏
- ④ ヤマハ発動機(株)スポーツ推進グループの協力を得て、タグラグビーセットの提供先でヤマハ発動機ジュビロの現役選手による指導を実施
- ⑤ 水辺の風景画コンテストも徐々に応募作品が増えた。工藤和男審査員長らが全国の幼稚園や小学校を訪問して開く大臣賞表彰式も定着した
- ⑥ 車いすマラソンの副島正純選手(体験4期生)は、体験チャレンジャーの中では最年長の40歳(当時)。パラリンピック金メダルを目指すその情熱は多くのチャレンジャーに刺激を与えた
- ⑦ YMFSセーリング・チャレンジカップを長年支えた故・荒田忠典氏(静岡県セーリング連盟会長)。同大会では、後にその名を冠した荒田杯の表彰が行われるようになった
- ⑧ 16歳でロシアに渡ったアイスホッケーの新谷誠選手(体験4期生)と、故・西田善夫審査委員。異国の環境で苦闘する新谷選手を中間報告会で激励した





第1期生の山本篤選手(障害者スポーツ/陸上・走幅跳)は、2016年リオパラリンピック後の報告会で「母が見つけてきたパンフレットを見て、言われるままに申請した。まさか10年にわたってお付き合いするようになるとは思っていませんでした」と振り返った

チャレンジすることの尊さを、 若者に、そして社会に。 スポーツチャレンジ助成事業の第一歩。

スポーツチャレンジ助成の第一歩は、まだ設立して間もない財団ということもあり、「果たして応募は集まるのか?」「集まったとしても、それはこの財団が求める人材像なのか?」という確信を持ってぬまのスタートだった。しかしその反面、「チャレンジ」をキーワードに据えた新たな助成事業のコンセプトは、情報の受け手からすると自由にイメージをふくらませるだけの幅があったのかもしれない。各方面に募集告知の依頼を展開したところ、特に各大学が積極的に告知をしていただき、結果、想定を大幅に上回る191件もの応募が集まった。

こうして第1期生となる合計31件(奨学生を除く)のチャレンジャーを選考し、4月24日、東京・丸の内MY PLAZAで初めての助成金贈呈式を開催した。挨拶に立った浅見俊雄審査委員長は、第1期生を前に「まず目標を明確にして、そこに到達するための計画を立て、実行に移す。そうして生まれた成果を客観的に検証すれば、さらなる成長に必要な課題を抽出することができる。ビジネスマンがそうするように、皆さんもPDCAの循環によって日々成長してほしい」と激励し、四半期ごとの報告書の提出や年度末に開催する年間報告会など、チャレンジャーが取り組むべき制度の概要が伝えられた。「しつこい(質濃い)助成」という言葉が生まれるのはその数年後だが、基本的な姿勢は第1期生を迎えた時点ですでに存在した。

翌2008年3月25・26日には、スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングの前身となる初の「年間報告会」がやはり丸の内で開催された。初日に体験チャレンジャーの報告、二日目に研究チャレンジャーと奨学生の報告が行われたが、相互の交流から生まれる化学反応によってさらなる成長を期待して、翌年度は「スポーツ・チャレンジ・ウィーク」と改称。体験/研究チャレンジャーの交流機会を拡大し、また特別講演を開くなどコンテンツを拡充して5日間にわたって開催した。

2007/2008 平成19年度

2006年11月、伊吹文明文部科学大臣より設立認可を受け、翌2007年2月に初の理事会及び評議員会を開いて(財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は船出した。9月には(財)日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)を清算し、新財団YMFSがその主要事業を受け継いだ。この年の10月、小泉政権が推し進めた郵政民営化が実現し、日本郵政グループがスタートした。

スポーツチャレンジ助成事業

2006年11月の財団設立直後から第1期生の募集を開始。翌年2月までの募集期間に体験助成74件、研究助成101件、奨学生16件の合計191件の申請が寄せられた。体験・研究の申請が予想を上回った一方、奨学生の応募が少なく、「留学先の決定時期と募集期間にギャップがある」との反省から、翌年度以降、募集を前倒した。第1期生には後にパラ陸上のリーダーとなる山本篤選手や、体験助成の審査委員となる小島智子氏などが名を運ねた。



■平成19年度(第1期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	74件	15件	1,392万円
研究助成	101件	16件	2,256万円
奨学生	16件	3件	360万円(1年分)
計	191件	34件	4,008万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

JMPFから事業を引き継いだジュニアヨットスクール葉山を中心に、全国15のセーリングクラブと提携。2007年10月に提携スクール会議を開催(静岡)し、相互協力によってマリンスポーツの振興活動に取り組むことを確認した。また提携スクールに対しては、AED救急蘇生セットの提供や指導者育成のための支援などを行った。

■スポーツ教材の提供

教育機器提供(当時)事業をスタートし、サッカーボール、ラグビーボール、ストップウォッチ、万歩計を全国のスポーツの現場に提供した。初年度の申請は小中学校を中心に合計220件。抽選により48件の提供先を決定した。また、提供先の団体から提供品の使用実績や使用方法、その効果などのレポートを回収し、次年度以降の事業企画の参考とした。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト



JMPFから事業を引き継いで絵画コンテストを実施。夏休みを挟んだ募集期間の設定により、前年比で約2倍の6,373点の作品が寄せられたほか、夏休み期間中に体験したことを描いた作品が増加した。一方で応募が減少した幼稚園に対しては、告知方法などについて再検討を行った。

■その他

新しい財団の認知を拡げるため、さまざまな広報活動にも取り組んだ。2006年12月に公式ホームページを公開したほか、助成対象者のチャレンジを紹介するPR誌「Do the Challenge」を刊行して全国の教育委員会や競技団体、報道各社等に送付した。また、事務局スタッフが競技会等のチャレンジの現場に頻りに足を運び、チャレンジャーを激励するとともに、助成事業の改善点等を探りながらその基礎を固めていった。



初めての表彰式には、女子柔道の上野雅恵選手(中央)や、車いすテニスの国枝慎吾選手ら、受賞者の指導を受けたアスリートたちが祝福に訪れた。「私がメダルをもらうたび、中野先生に何かしてあげられないかいつも気にかけていた」と上野選手

スポーツを支える「縁の下の力持ち」。 その隠れた功績にスポットを当てる 新たな表彰制度がスタート。

「そうした表彰ならすでに存在する。もう少し考えてみてはいかがでしょうか?」。事務局が用意した素案に耳を傾けながら、こう助言してくださったのは当財団理事の岡崎助一氏(当時・日本体育協会専務理事)だった。「スポーツ界の発展に寄与したトップアスリートや指導者を表彰する」というプランに対して、「この財団ならではの概念が必要」という注文だった。

まだ歩みを始めたばかりの小さな財団の事務局の中には、もっとスポーツの現場の実態を知らなくてはならないという意識が常にあった。そうした課題を抱えながら現場に出かけてみると、そこにはスポーツ報道などには取り上げられることのない「縁の下の力持ち」たちの姿があった。全国には、身を削ってスポーツの底辺を支えている指導者や支援者が大勢いる。そうした人びとにスポットを当てることで、チャレンジすることの素晴らしさや努力は報われるといったメッセージを社会に発信できるのではないかと。岡崎理事が求めたのは独自性のあるコンセプト。それが決まった。

やがて16件の推薦が競技団体や報道機関から寄せられた。事務局では2度にわたる選考委員会を開き、初の功労賞に北海道新聞の推薦による車いすテニスコーチ・丸山弘道氏を決定した。中野氏は女子柔道の普及に努めるとともに、高校柔道の指導者として後にオリンピック等で活躍する選手たちの基礎を築き、丸山氏は車いすテニスの指導法の確立に挑んで国枝慎吾選手など世界トップの選手を輩出した。まさに全国で奮闘する「縁の下の力持ち」を代表するような人物だった。

表彰式には受賞者を祝福する大勢の関係者が駆けつけた。そうした人びとが口々に話したのは「メダルをもらうたび、中野先生に何かしてあげられないかいつも気にかけていた」(上野選手)、「僕たちを支えてくれる丸山コーチにスポットが当たったことが何より嬉しい」(国枝選手)という喜びの言葉だった。

2008/2009 平成20年度

北京オリンピック・パラリンピックが開催されたこの年、平成20年12月から施行される「公益財団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」に向け、かねてから準備を重ねてきた公益財団法人認定の申請を行った。また、「スポーツ界の縁の下の力持ち」を讃えるヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞を新設し、その第1回受賞者として中野政美氏(功労賞)と丸山弘道氏(奨励賞)を選出。年度末のスポーツ・チャレンジ・ウィークの併催行事として表彰式を行った。

スポーツチャレンジ助成事業

第1期生の実像を通じて、求める人材像のイメージが明らかになったことから申請件数は約4割減り117件となった。その一方、「絞り込まれたことで申請者全体の質は上がった」というのが審査委員の実感でもあり、体験助成の申請者全体の平均年齢は、第1期生では34.8歳であったのに対し、第2期生では26.8歳と大幅に若返る結果となった。体験助成ではサッカーの岡本達也選手が2年目のチャレンジに突入し、またパラ陸上の多川知希選手が山本篤選手からバトンを受けて第2期生に加わった。

■平成20年度(第2期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	29件	13件	1,014万円
研究助成	65件	12件	1,692万円
奨学生	23件	6件	720万円(1年分)
計	117件	31件	3,426万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

スクール創立から30年を迎え、6月14日に葉山マリーナで記念式典「夢・誇り・絆」を開いた。当日は100名以上のOB・OGや歴代の指導者が集まり旧交を温め合うとともに、北京オリンピックに出場する卒業生、鎌田奈緒子選手らに激励のメッセージを贈った。一方、30年の指導実績に裏打ちされたジュニア選手向けの指導テキストとDVDを制作し、全国のジュニアスクールに向けて配布(一部販売)を開始した。

■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

全国17クラブからジュニア・ユース世代の62選手が参加。北京オリンピック代表の飯島洋一選手、松永鉄也選手、上野太郎選手が特別アドバイザーとして参加して、講演や出場選手へのアドバイスなどを行った。

■スポーツ教材の提供

事業名を「スポーツ教材の提供」と改めて提供先を募集。191件の申請の中から抽選により46件の提供先を決定した。また6月14日に発生した岩手・宮城内陸地震で被災した宮城県東原市から申請のあった2団体については、特別枠を設けてスポーツ教材を提供した。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

20回目の開催を迎え、全国から5,291作品が寄せられた。「働く海」「美しい海」「生きる海」「楽しい海」の4部門を設定した結果、幼児および低学年からは水辺での体験を描いた作品が、また高学年の児童からは水辺の産業や水棲生物を描いた作品が多数寄せられた。

スポーツ文化・啓発事業

■第1回ヤマハ発動機スポーツ振興財団 スポーツチャレンジ賞



【功労賞】中野 政美氏
女子柔道の世界レベル選手の育成と女子柔道の発展

【奨励賞】丸山 弘道氏
北京パラリンピック金メダルへのチャレンジ



この年から設けられた中間報告会には、第3期生に加え、オーストラリアでラグビー武者修行に励む第2期生の山口真理恵選手等も参加。現地クラブチームで豪州代表選手たちとともにトレーニングに励む一方、州選抜チームに選出されたことなどを報告した

「しつこい(質濃い)サポート」が本格化。 四半期報告と年間成果報告に加え、 中間報告会を新たに実施。

「この財団の助成は、しつこいですよ。質が濃いです」——。スポーツチャレンジ助成の第3期生を迎える助成金贈呈式で、浅見俊雄審査委員長はチャレンジャーたちを前にこう話した。「皆さんの四半期報告には必ず私のコメントを添えて戻します。そこでもう一度自分の活動を見つめ直して、次のチャレンジにつなげていってください」。

しかし一方で、事務局に寄せられる報告書からは、当初の計画どおりに研究が進んでいないチャレンジャーや、記録が伸びずに思い悩むチャレンジャーの姿が見て取れた。その中には出場した大会の結果により次のステップに進めず、計画を変更せざるを得ないチャレンジャーも含まれていた。「助成期間の半期を終えたところで、直接、叱咤激励する機会をつくったらどうか」「互いに現状を報告し合うことで、チャレンジャー同士の刺激にもなるのではないか」。中間報告会の発想はこうして生まれていった。

初めての中間報告会には、第3期生に加えて数名の第2期生も参加して、審査委員に活動の中間報告を行った。台湾デフリンピックに出場した棒高跳の竹花康太郎選手は、「競技の途中で足をつってしまった。これまで試合中にこうしたトラブルを経験したことがなく、動揺してしまっ」と振り返りながらも、「デフリンピック金メダリストの記録を抜く4m86cm」を新たな目標として掲げた。この年、竹花選手はデフリンピックでの活躍により厚生労働大臣賞を受賞している。

中間報告会は翌年度以降も継続され、目標達成に向けたチャレンジャーのPDCAにおいても重要な役割を担うようになった。「下半期の活動に向けて、自分自身の活動をあらためて整理する機会になった」というチャレンジャーの感想に加え、中間報告会を定例化することで「年度末の成果報告の質が高まった」(審査委員)といった効果も生み出していった。

2009 / 2010 平成21年度

8月の衆院選で民主党が過半数を獲得し政権交代が行われたこの年、前年の12月に施行された新公益法人法のもと、ヤマハ発動機スポーツ振興財団は公益財団法人として新たなスタートを切った。3月18日に認可を受けた公益財団法人の第1号(3団体)のうちの一つだった。一方、世界のスポーツシーンでは、ベルリンで行われた世界陸上の男子100m決勝で、ウサイン・ボルト選手が9秒58の世界新記録を樹立した。

スポーツチャレンジ助成事業

年度末のスポーツ・チャレンジ・ウィークを、ヤマハリゾートつま恋(静岡)に移して開催。またこの年から優れたチャレンジに贈られる「審査委員特別賞」と「特別チャレンジャー賞」を設けて表彰を行った。「審査委員特別賞」は該当なし、「特別チャレンジャー賞」にはラフティングの世界大会で準優勝したTHE RIVER FACEをはじめ、研究チャレンジャーの星川佳広氏、吉岡伸輔氏、増田和実氏の4件が選出された。



■平成21年度(第3期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	46件	15件	1,113万円
研究助成	74件	11件	1,695万円
奨学生	17件	5件	600万円(1年分)
計	137件	31件	3,408万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

セーリングスポーツの振興を促進するために、ジュニアヨットスクール葉山の模範スクール化に取り組んだ。その第一歩として、スクール生(個人の努力)、保護者(共感・協力)、指導者(人格形成)のスタンスを明確にするとともに、「セーリングへの興味・習慣化」「スポーツ基礎力の向上」「思考力の向上」「応用力の向上」「総合力の向上」と5つのステップを設け、スクール生のさらなる成長のためのプログラムづくりに着手した。

■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

清水ヨットスポーツ少年団など初参加の5クラブを含め、全国から22クラブ・102選手が参加。またセーリングスポーツの強豪国ニュージーランドから選手と指導者4名を招待して国際交流を図った。合わせて、ジュニア/ユースナショナルチームの樂樂洋光強化コーチと北京オリンピック代表の飯島洋一選手を招いて勉強会を開き、レース映像等を使った指導を行った。

■スポーツ教材の提供

新学習指導要領により体育教育の現場が活発化したことで、前年度の約3倍となる588件の申請があった。抽選により提供先50団体を決定し、スポーツ教材を使った活動事例をホームページで紹介する試みも開始した。



■全国児童 水辺の風景画コンテスト

「水辺への興味・関心の拡大」と「子どもたちの感性の発露、可能性の拡大」というコンテストの意義を再訴求した結果、全国から5,166点の作品が寄せられた。各審査員からは「全体の作品レベルが向上した」という感想が聞かれ、工藤和男審査委員長も講評の中で「体験をもとにした、元気がいきいきとした作品が増えた」という印象を語った。

スポーツ文化・啓発事業

■第2回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

[功労賞] 塚越 克己氏
日本のスポーツ医・科学の発展を牽引した「緑の下の力持ち」



[奨励賞] 増田 雄一氏
トップレベルのサポート技術を一般レベルに拡大する取り組み



ジュニアヨットスクール葉山のスクール生たちが、葉山マリーナと伊豆大島を往復する外洋帆走にチャレンジ。個々のスクール生がチームワークやリーダーシップを発揮しながら往復52マイル(96キロ)の冒険航海を成功させた

子どもたちは夏に成長する! リーダーシップとチームワークを育む 往復52マイルの冒険航海。

長い歴史を持つジュニアヨットスクール葉山。その運営についてあらためて検討を行い、目指す方向として「全国のジュニアスクールのモデルとなる存在」と設定した。平成22年度はそれを具現化する第一歩となった。

通常のセーリング練習に加え、新たに組み入れられたのが各種の自然水辺体験学習の機会だった。ニュージーランドの学校教育の現場で採り入れられる「ウォーターワイズ教育」を参考に、「自分の身を自分で守る」ための講習や、「チームワークを育む」ための共通体験・共同生活機会の創出を目指した活動を次つぎに企画・実行していった。中でも全長13メートルほどのセーリングクルーザーで葉山と伊豆大島を往復する外洋帆走訓練は、スクール生たちに素晴らしい思い出と、大きな自信をもたらすことになった。指導者たちに見守られながら、高校生が舵手を担い、小中学生はコックピットやナビゲーターを担当した。リーダーシップとチームワークの強化は、この航海の重点目標の一つでもあった。

食事リーダーを担当した中学1年生は、「合宿で教えてもらった栄養についても考えながら、コーチと相談してバランスの良いメニューを考えた」と話し、現在位置を確認する役割を任された小学6年生は、コンパスを片手に「大島が見えてきたときは本当に安心した」と真っ黒に日焼けした顔をほころばせた。

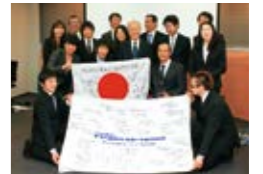
無事葉山に帰港した後、「普段の練習とは異なった環境で過ごしてみると、スクール生たちの別の面が見えてくる」と振り返ったのは同行した指導者の一人。「普段以上の力を発揮するスクール生、下級生の行動を見守りサポートする上級生など、今後の指導の参考になるようなそれぞれの個性を把握することができた」と、コーチ・スタッフ陣にとっても有意義なプログラムとなった。

2010 / 2011 平成22年度

3月11日、東日本大震災が発生。甚大な被害をもたらした未曾有の大災害に際し、スポーツ界も「スポーツの力」を結集してさまざまな救援活動や復興支援活動を展開した。震災直後に開催を予定していた第4回スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングは中止し、その代替としてエリア別の報告会を5会場で実施した。前年の8月には政府から「スポーツ立国戦略」が示され、スポーツ基本法制定に向けて動き出すと同時にスポーツ庁設置の声も高まっていった。

スポーツチャレンジ助成事業

東日本大震災の発生により、3月14~16日に開催を予定していたスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングを中止。しかし、個々の成長のためにチャレンジ成果の共有機会は不可欠と考え、エリア別の小規模報告会を5会場で開催した。また、4年目を迎え、OB・OGのチャレンジにも顕著な成果が顕れ始めた。第1・2期生の岡本達也選手(サッカー)が目標のJリーガー復帰を実現したほか、近代五種の黒須成美選手が日本選手権を制してロンドンオリンピック出場に弾みをつけた。チャレンジャー相互の交流を深めるために、CNS(チャレンジャーズ・ネットワーク・システム)をこの年から導入した。



■平成22年度(第4期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	46件	9件	640万円
研究助成	84件	11件	1,305万円
奨学生	20件	3件	360万円(1年分)
計	150件	23件	2,305万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

自然体験学習のカリキュラムを充実させ、夏休み期間にあたる7~8月にかけて水辺安全講習会、黒姫高原トレッキング、伊豆大島外洋帆走訓練、逗子海岸清掃ボランティアを実施した。スクール生のさらなる成長を促すとともに、モデルスクール化に向けて実施後の各種調査とその分析を行った。なお第19回セーリング・チャレンジカップIN浜名湖は、東日本大震災の深刻な状況を踏まえ中止した。



■スポーツ教材の提供

申請方法の簡便化を図ったことなどから申請数が増加(611件)し、抽選により47団体にスポーツ教材を提供した。また、新学習指導要領を受け全国の学校では子どもたちの体力向上に向けた取り組みが活発化している状況から、事務局が現場を訪問し、ロールモデルとなる優良事例をホームページで紹介する取り組みを強化した。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

「美しい海」「働く海」「楽しい海」「生きる海」をテーマにした作品を募集し、全国の幼稚園、保育園、小学校、絵画教室などから前年度の1.6倍となる8,307点の作品が寄せられた。



スポーツ文化・啓発事業

■第3回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

[功労賞] 高田 静夫氏
日本人審判員の育成をめざした各種制度の確立と運用



[奨励賞] 中村 宏之氏
雪国から世界をめざすトレーニングの独自開発と実践



[奨励賞] 中北 浩仁氏
強化システムの大改革で日本初のメダル獲得にチャレンジ





第1次支援では、運動不足解消や創作活動奨励の一助として、被災地の幼稚園や学校、避難所等にスポーツ教材と画材の支援を行った。また第2次支援では「子どもの学び支援ポータルサイト」の情報をもとに東松島市の小学校4校に19種のスポーツ教材を支援した

迅速かつ実効性の高い対応を指針に、YMFSのネットワークを活かした復興支援活動を展開。

3月11日に発生した東日本大震災では、多くの尊い人命が失われるとともに国民生活にも未曾有の被害をもたらした。一方、震災発生後には多くのボランティアが被災地に駆けつけて支援の輪を広げるなど、復旧・復興の過程を通じて助け合いの精神や社会の絆の大切さがあらためて浮き彫りになった。そうした中で、スポーツ界もさまざまななかたちで復興に向けた活動を展開し、多くの人々を勇気づけた。

当財団ではこの年、平成19年度より毎年実施している「スポーツ教材の提供」を中止し、被災地域で起きている子どもたちの運動不足解消や、創作活動奨励の一助として、幼稚園、学校、避難所等にスポーツ教材（サッカーボール700個、ドッジボール700個、長縄500本）と、画材（クレヨン12,000セット、スケッチブック12,000冊）の支援を行った。この第1次被災地支援の実施に当たっては、マルマン（株）とルフラン&ブルジョワ社の協力をいただいた。また、東松島市教育委員会を通じて、大曲小学校など市内の4校にフットサルゴールや跳び箱、逆上がり補助板、デジタル握力計など計19種のスポーツ教材を支援する第2次支援を行った。これらの支援品や支援先については、文部科学省が運営する「子どもの学び支援ポータルサイト」の情報をもとにした。

一方、津波によりホームマリナーを失うなど甚大な被害を受けたセーリングクラブや高校ヨット部に対しては、練習機会や競技会参加機会の提供支援を行った。当財団が運営するジュニアヨットスクール葉山が浜名湖で開いた夏合宿に、いわきジュニアヨットクラブ（福島）から2名の小学生セーラーを招いたほか、第20回セーリング・チャレンジカップIN浜名湖では、被災地からの参加者に輸送費の補助や参加費免除の措置を設け、県立いわき海星高校（福島）など被災3県から合わせて9選手が参加した。なお、これらの支援については平成24年度も継続した。

2011/2012 平成23年度

50年ぶりにスポーツ振興法が改正され、スポーツ基本法の制定・施行や、その総合的かつ計画的推進のためにスポーツ基本計画が策定されるなど、スポーツを通じた幸福で豊かな社会づくりに向けた基盤整備が進められた。FIFA女子ワールドカップ2011ではなでしこジャパンが優勝を飾り、震災で消沈する日本に一筋の光を差した。こうした中、当財団は設立から5年の節目を迎え、「事業のさらなる質向上」と「新たな価値づくり」を基調とする中期事業方針を策定した。

スポーツチャレンジ助成事業

平成22年度成果報告会の代替として東京、静岡、大阪で計5回のエリア別報告会を行い、ラフティングの世界大会で優勝したTHE RIVER FACEが審査委員特別賞を、また研究チャレンジャーの三浦哲郎氏が特別チャレンジャー賞を受賞した。7～11月に計7回実施した中間報告会では、「震災時にスポーツは何ができるのか?」をテーマにスポーツ討論会を開き、活発な意見交換を行った。



■平成23年度（第5期生）助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	48件	14件	1,180万円
研究助成	90件	14件	1,210万円
奨学生	19件	4件	480万円(1年分)
計	157件	32件	2,870万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

レーシングクラスのスクール生（高校3年生）が日本ユース代表に選出され、イギリスで開かれたユース世界選手権に出場。また、ベーシッククラスのスクール生（小学4年生）がタイのセーリング合宿に参加するなど国際交流が進んだ。自然・水辺体験活動も2年目を迎え、この年も伊豆大島外洋航海訓練をはじめとして、カヌーやラフティング、川でのトレッキングなど、さまざまな体験活動を実施した。

■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

第20回大会の節目であり、震災の影響で2年ぶりの開催となった同大会には、全国26クラブから88選手が参加。輸送費の補助や参加費免除の措置を設けた被災3県からは9選手が参加した。



■スポーツ教材の提供

平成23年度の「スポーツ教材の提供」を中止して、子どもたちの運動不足などの課題が浮上した被災地への支援を行った。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

水辺体験活動を促進するため、テーマを「水辺で発見・体験したことややんだこと」「水辺の仕事や乗り物」「水辺で見た景色」「水辺に棲む生き物」の4部門に変更して実施。全国から合計6,472点の作品が寄せられた。幼児からの応募に増加傾向が見られたことから、幼稚園や保育園で水辺の体験行事などが積極的に行われていることがうかがえた。



スポーツ文化・啓発事業

■第4回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

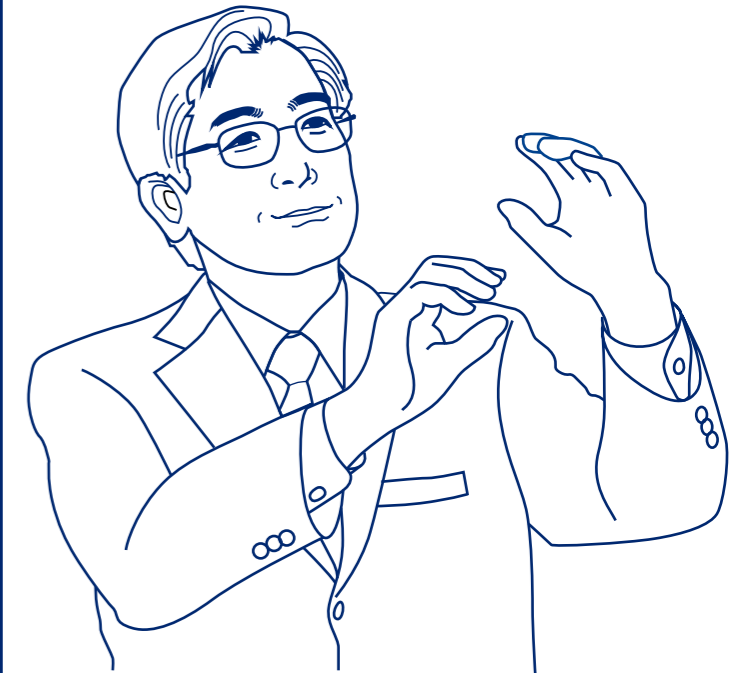


【功労賞】 岸本 健 氏
スポーツ写真家の草分けとして、スポーツ報道の機会拡大に貢献



【功労賞】 水谷 章人 氏
独創的な表現でスポーツの魅力や伝え、スポーツ写真家の育成・環境整備にも尽力

事務局長の回想



YMFSも常にチャレンジャーだった

設立からの5年間を総括すれば、途中でリーマンショックや東日本大震災という未曾有の出来事がありながらも、チャレンジ助成、スクール、コンテスト、教材提供、表彰制度などの新事業を、着実に軌道に乗せた実のある5年間だったということになるだろう。あらためて先生方をはじめ多くの皆様のご協力に感謝申し上げます。

設立前夜、「財団は何を目指し、誰に対して、どんな活動をするのか」を明確に表すべく、考え抜いて白いキャンパスに描きこんだのがスポーツ振興と文化向上のためのピラミッド構造の事業概念図だった。「憧れ（アスリート）」「スポーツ科学・研究」「指導者」「周辺環境向上」の4要件を頂点に、そこを目指すチャレンジャーを助成する事業、裾野を広げるための事業、文化向上のための事業を描いた。そして、ピラミッドの中心に「チャレンジスピリット」と書き入れた。

次は、その概念図に魂（財団理念と行動指針）をどう吹き込むかだ。YMFSはチャレンジャーや社会に対して誠実に向き合いサポートすることで、国家社会に貢献することが使命であり、自身がチャレンジャーでなければいけないと考えた。

そこで、設立趣意に「本社に勤務する者は勉学修養を心がけ、親切至誠を以て事にあたり職務を愛好し実行に敏に、特に規律協同を尚び不撓不屈の精神を以て工夫改善に志し業務を通じて国家社会に貢献し以て有用の材たらんことを期すべし」というヤマハ発動機の社訓の精神を採り入れた。

YMFSスタートからの5年間、白いキャンパスに描かれた概念図に色を付け、事業を軌道に乗せてくれたのは先生方であり、チャレンジャーであり、各事業の関係者だった。まさに、多くの方々の協力があったからこそだ。生まれて間もない「よちよち歩き財団」への協力の最大要因は、その頼りなさゆえの面もあるが、概念図と趣意に示された「チャレンジ」への共感が大きかったのだろう。

最後に、事務局として振り返れば、縁の下の力持ちとしての役割を果たしながらも、自分たちもチャレンジャーとして、壁やハードルを乗り越える喜びを実感し楽しく充実した5年間だった。

岸川 善次郎 元事務局長

つなげよう、チャレンジする心を。

YMFSはいかに生まれ、なにを目指し、10年の歩みの中でどのような価値を生み出してきたのか——。
未来を担う人びとへ、いま伝えたいこと。

長谷川至 × 小島智子 × 浅見俊雄



世の中じゃ「内向きだ」なんて言われるけど、若いチャレンジャーたち、いや、なかなか大したもんですよ。

浅見 俊雄 あさみ・としお
ヤマハ発動機スポーツ振興財団 理事
YMFS スポーツチャレンジ助成 審査委員長

小島 きょう初めて磐田という町に来て、ちょっと感激しました。世界に名だたるヤマハ発動機という会社があって、その町にサッカーやラグビーのトップチームがある。それから海外の地方でよく見かけられるような1万4,000人規模のスタジアムと、ヤマハファンが集うミュージアムまである。豊かだなあ、という印象を持ちました。

長谷川 ありがとうございます。

小島 そもそもヤマハというものづくりの会社が、なぜスポーツ振興財団を設立されたのですか？

長谷川 ヤマハ発動機は1955年に創立したのですが、50周年を迎えて、その記念事業の一つとして企画しました。会社の創立当時、日本には200社近い二輪車メーカーがあって、ヤマハはその最後発という存在だったんです。

浅見 そんなにたくさんメーカーがあったんですか。

長谷川 そうした中で、創業者のひらめきだったのでしょうか、いきなりモータースポーツの世界に打って出た。大きなレースで勝てば新興メーカーにとって絶好の宣伝になるだろうし、技術を磨くことにも、社員の気持ちを一つにすることにもつながるだろうからと。それで初めてのレースで優勝した。

小島 すごい！

長谷川 その後、ボートの事業を始めた時も、スノーモビルの事業を始めた時も、やはり競争の世界に出ていきました。そういう歴史を歩みながら、スポーツは社員の士気を高めるということを会社として学んでいったわけです。サッカーやラグビーで「日本一になるぞ!」「世界を目指すぞ!」というもそうした気持ちから生まれていますし、50周年を迎えて社会に感謝を——となった時に、スポーツを選択したのもごく自然な判断だったと思います。

小島 子どもの頃、家にはヤマハのピアノがありました。ですから私にとってヤマハと言えばピアノというイメージです。

長谷川 会社ができたばかりの頃は、販売店さんにオートバイを売りに行くと「おお、ヤマハか。どんないい音がするんだ?」なんて言われたりしたそうです。逆に私がアメリカに駐

在していた時の話ですが、エレキギターの販売に行ったら「おい、何ccのエンジンが載ってるんだ?」なんて言われたりして。アメリカではオートバイのイメージが強いからです。

浅見 私は東南アジアに審判をやりに行き、「ヤマハ!」「ホンダ!」「スズキ!」とヤジを飛ばされたりしましたよ。身近にあるオートバイが、日本のイメージだったんでしょうね。

小島 しかし、こうして当時の資料をめぐってみると、財団の企画から申請・認可までをものすごく短い期間で実現されているんですね。

長谷川 うちの会社はそういう社風なんですよ。考えるより走れ、と。走りながら考えろ、と。だけど、やるぞと決めた後は事務局の岸川さんを中心にみんな非常に頑張ってくれた。それからコンセプトが単純明快だったから、認可に向かう過程でも理解や賛同を得やすかったんだと思います。

浅見 それが「チャレンジ」というキーワード。私はその直前までJISS(国立スポーツ科学センター)のセンター長をやっていた。アテネ五輪で一区切りつけることを決めていた。そのアテネで史上最多のメダルを獲得してくれて、肩の荷が下りたタイミングで話をいただいたんです。「スポーツ振興を通じて、チャレンジすることの尊さを社会に伝えたい」と。

長谷川 この遠州地方には、やってやろう!という意味の「やらまいか」という言葉があるんです。そうした風土の中で事業を展開してきたヤマハも伝統的にチャレンジ精神を尊ぶような気風があって、だから多少やんちゃにも育った。そういう意味では「チャレンジ」というコンセプトの立案も、これまた非常に自然な成り行きだったんだと思うんです。

浅見 なるほど。楽器のヤマハは文化部だけど、こっこのヤマハは運動部だからやんちゃなんだな(笑)。

小島 私は、チアリーディングがスポーツなのか?という疑問を持っていて、この助成に申請する時には躊躇もしました。自分に壁を作ってストイックに夢を追いかけていた時期だったので、へんに気が張っていたのかもしれない。

浅見 壁とは?



自分を見つめ直すこと。
その大切さを学ばせてもらいました。
ここは、私の「帰る場所」でもありました。

小島 智子 こじま・とものこ

YMFS スポーツチャレンジ体験助成 第1・3・4期生
YMFS スポーツチャレンジ助成 審査委員
元NFLチアリーダー

小島 どうせ誰も助けてくれないという思いの中で、強がっていたんですね。その強がりがないと戦っていけないという精神状態でもあったと思います。

浅見 そんな時に、トップアスリートに対する助成ではなく、チャレンジする人を応援するこの助成に巡り合ったと。

小島 薫にもすすがるような思いで(笑)。

長谷川 小島さんとの面接のことはよく覚えてますよ。浅見先生と「あんな環境で、よく若い女性が一人で頑張れますね」なんて話してましたから。あれから10年ですか。

浅見 アメリカンフットボールというのは米国最大のスポーツ。当然、チームからなにかの報酬が出ていると思ったら、そうじゃないって言うから我われも驚いて。

小島 日本に帰ってくると、みんな「すごいね」とか「ロールモデルを作ったね」と言ってくれたんですが、アメリカでの日常は毎日が本当にしんどかった。

長谷川 そんなしんどい日々を乗り越えようとするモチベーションって、どんなものだったんですか？

小島 夢、ですね。それから意地。「あなたなんか無理よ」と言った人を見返したいという思いもありました。

浅見 歯を食いしばってチャレンジして、最後はキャプテンまで務めたんだからすごいよ。若い人は内向き志向だなんて言われるけど、チャレンジャーたちを見てるとなかなか捨てたもんじゃないと感じますよ、私なんかは。

小島 いまになって思うのは、夢と目標の区別がつかないまま私は行ってしまったのだな、ということです。それが違うもの

のということに気づいたのは、スポーツチャレンジ助成のおかげでした。馬みたいに夢ばかり追いかけていた私に、目標はなんだ？ その目標にどうやってたどり着くんだ？と、しつこく問い詰めてくるような(笑)。

浅見 そんなにしつこくないだろう(笑)。

小島 いいえ、報告会の日に帰国できないことを伝えたら、じゃあSkypeで報



告してくださいと。報告書の督促も、ほんと頻繁に。まったく逃げ場がない。ついには目標の立て方そのものが間違っていたのかと思ひ悩んだり。

長谷川 私は船乗りなので、目標というものを航海に例えることがあるんです。ある岬を目標に走っていくとしますよね。なんとかそこに到達すると、次の岬が見えてくる。でも、最初目指した岬を回航しない限りは次の岬も見えないんです。

小島 なるほど。まず見える目標にたどり着く。そこに行けば次の目標が見えるはずだ、と。

浅見 私にとっては、JISSをつくることのある意味、夢だったんですね。夢だったものが、具体的な目標になって、幸いにも初代センター長もやらせてもらった。その頃もう70歳に近づいていたんだけど、この施設を活用してもっとたくさんのメダルを、という次の目標も生まれた。その目標をアテネで達成できたところで、すかさずヤマハから新しい目標をいただいて。

長谷川 おんぶに抱っこで、本当に申し訳ないことでした(笑)。

浅見 でも、こうして10年もやらせてもらってるのは、小島さんのような素晴らしいチャレンジャーがいたからですよ。みんなとの出会いや交流がなければ、こうは続けられない。

長谷川 その助成対象者全員の報告書にコメントをつけてくださるのも、報告会で激励して下さるのも、浅見先生をはじめとする先生方。亡くなった西田(善夫)先生も、ずいぶん厳しく指導してくださいましたね。

浅見 小島さんにはあまり厳しいこと言った記憶はないな。

小島 私は泣いてた記憶しかありません。今だから言えますけど、報告書をほぼ白紙で出したことがあって、そうしたら事務局の河邊さんが「何か悩みを抱えているんですね？」と時間を割いてくださった。その時、アメリカで意地を張ってる私にも帰る場所があるんだと実感しました。そう、私にとってはまさに「帰る場所」でした。

浅見 そうなんだよな。事務局は私にしつこいって言うけど、一番しつこいのは事務局なんだ。

長谷川 そういう助成を受けて、どんなことが得られましたか？

小島 たくさんありますが、報告機会がたくさんあることで、自分と向き合うことを覚えました。目標は本当にこれでいいのか、活動が惰性になっていないか、報告書に向き合いな



みんなの気持ちが一つになる。
喜びも苦労もみんなでも共有する。それは、
スポーツが持つかけがえのない価値なんでしょうね。

長谷川 至 はせがわ・とおる

ヤマハ発動機スポーツ振興財団 初代理事長
ヤマハ発動機(株) 元代表取締役社長

ら自分と向き合うことができました。

浅見 それで、日本人として初のキャプテンにまでなった。

小島 「連続合格の最長記録を更新」という目標を掲げたら、事務局から「去年と同じじゃないですか」と。正直に言うと「キャプテンになる」とか「プロボウルのオールスターに選ばれる」と書くのが怖かった。でも、それを書くことによって、向かうべき場所がはっきりしました。

長谷川 そうした経験を経て、いま審査委員をしていただいていると。

浅見 世界のトップまで行ったんだから、それを次の世代に伝えてほしいと思ったし、それができる人だから。実際に審査選考をやってみて、どうでした？

小島 強い思いを持った若い人の言葉を聞くと、全員を応援したいという気持ちになります。でも、どこかで判断しなければならぬし、その判断は若いアスリートの未来を左右してしまうかもしれない。責任の大きさを痛感しました。

浅見 10年経って、なかなか個性的な財団になったと思うけど、だからこれで満足しちゃいけないな。常に良い方向に変わっていくために、我われ審査委員も事務局も一緒に考えていかないと。ぜひ小島さんにも力になってほしい。

長谷川 世の中は少しずつ変わっていきます。だからこの財団の役割というのも少しずつモディファイしていかなければならない。そしてその方法は、浅見先生がおっしゃるようなみんなでも議論を尽くすことだと思います。小島さんは、これからのYMFSをどのように考えられますか？

小島 私はどうしてもチャレンジャー目線。競技者や研究者にとって故郷のように帰れる場所、チャレンジャーたちが心を裸にしていられる場所であり続けてほしいと思います。人はチャレンジすればするほど、外に向かえば向かうほど孤独になっていきます。お父さんお母さんのような先生方がいて、お兄ちゃんお姉ちゃんのようなOB・OGがいて、同級生でありライバルのような同期生がいる。そして叱られ、励まされ、刺激を受ける。この財団が持つ素晴らしさを失わないよう、私も微力ながらお手伝いさせていただきたいと思っています。

長谷川 企画した当時は、こんなふうにしたかったという絵を描ききれていませんでした。でも、こうやって振り返ってみると、本当にいい財団に育っていると嬉しく思います。お二人のお力添えをいただきながら、ますますの発展を願っています。本日はありがとうございました。

岡崎 助一 おかざき・じゅいち

公益財団法人日本体育協会 副会長、当財団評議員

挑戦とは、YMFSの事業活動そのもの

ヤマハ発動機スポーツ振興財団(以下財団という)は、ヤマハ発動機(株)の創業50周年を記念して、我が国のスポーツ振興とスポーツ文化の向上を目的として2006年11月に設立されました。

私は、当財団設立の当初から理事、その後評議員に就任させていただき、チャレンジスピリットの喚起と醸成を基本理念とした「スポーツチャレンジ助成事業」、「スポーツ振興支援事業」、「スポーツ文化・啓発事業」を三本柱とする各種事業の実施状況やその成果に関する報告をいただく度に、スポーツ界に身をおく者として大変大きな喜びを覚えておりました。

自己の夢・目標にチャレンジするアスリートや指導者等の活動を支援するスポーツチャレンジ助成事業では、昨年のリオオリンピック・パラリンピックで活躍するアスリートを輩出するなど、着実な実績を挙げております。

また、心身ともに健全な子供の育成を目指して、スポーツ環境整備等の支援を行うスポーツ振興支援事業では、サッカーボールやタグラグビーセットなどのスポーツ教材の提供において、希望する多くの学校等の中から抽選によって教材の配布先を決定しておりますが、2008年から私が抽選の任を承り対応してきました。教材の提供を受けた学校等から子供たちが大変喜んで活用しているという報告を受けるにつけ、私の抽選で漏れてしまった皆さんに大変申し訳ない気持ちで抽選くじを引く手がこぼれました。今後ともあきらめず毎年希望する旨のチャレンジをしていただきたいと強く思っています。

さらに、スポーツ文化の創造に寄与するため、スポーツ界を縁の下から支え、著しい成果を上げた人々に対する表彰等を行うスポーツ文化・啓発事業では、オリンピックやパラリンピアン活躍を永年にわたってサポートし、これまで注目を浴びることが少なかった方々を表彰するスポーツチャレンジ賞に私は大変感銘を受け、東京での表彰式に毎年参加させていただいております。

このように、この10年間において財団の展開する各種事業が我が国のスポーツの普及・発展並びにスポーツ文化の醸成に大きく寄与していることは、当財団の役員として大変誇らしく思う次第であります。

挑戦とは、当財団の推進する事業そのものであり、財団の支援の下で懸命に取り組むアスリート、研究者、子供たち、サポーターなどの精力的な行為そのものだと思います。

当財団におかれましては、今後ともこれまでの実績を基盤として木村理事長を中心に20年後、30年後を見据えてスポーツを巡る様々な課題に広く、深く挑戦し続け、我が国のみならずアジアそして世界のスポーツ界に貢献されますよう期待いたしております。



工藤 和男 くどう・かずお

一般社団法人創元会 会長、公益社団法人日展 会員、当財団「全国児童 水辺の風景画コンテスト」審査員長

健やかな心身を育むのは、子ども時代の貴重な体験から

ヤマハ発動機スポーツ振興財団(以下財団という)で開催している「全国児童 水辺の風景画コンテスト」は、平成元年にヤマハ発動機が主催する「浜の風景画コンテスト」として始まりました。その後、日本マリンスポーツ普及教育振興財団が運営を引き継いだ後、第13回からは「水辺の風景画コンテスト」として、海だけではなく川へ湖へと、さらに広く水辺とふれあうきっかけ作りとなるコンテストとして実施されてきました。

財団が主催団体としてその思いを引き継いだのは、第19回。第1回の開催時に審査員長を引き受けた時、55歳だった私とともに、コンテストも成長を続けてきました。開始当時は1,500点程であった応募作品も、第28回では1万点を超え、その内容も、家族や友達と一緒に水辺に遊びに行き、実際に見たり聞いたり触ったりと五感で感じたことを、実に素直に子どもらしく表現した作品が数多く見られます。それらはどれも素晴らしい出来栄で、審査員の皆様は作品を手を頭に悩ませながらも、自由な発想や表現力で描かれた作品を見て、どんな子が描いたのだろうかと思いを馳せながら楽しそうに選ばれています。

私が子どもの頃は、よく岩場から海へ潜って魚や貝を獲ったり、港で魚釣りをしたりしていました。そんな時、オコゼやクラゲなどに触れて感じた痛みや、サザエや手長エビを獲って食べた時の美味しさなど、なにものにも替え難い体験をいくつもしてきました。そうした体験を通じて、自然の恩恵や偉大さ、味覚や危険などを感じ取ったものです。しかし現在では、海岸はきれいに整備され、川岸はコンクリートで固められ、身近な生活の中にあるままの自然と触れ合える環境が減少しています。

子どもの頃の体験は宝物です。すばしっこく泳ぎまわる魚の動き、初めて魚に触れた時のぬるぬるとした感触、初めて1人で魚を釣り上げた時の達成感など、自然は子どもたちにワクワクするような好奇心や感動を与えてくれます。そして、健やかで豊かな心と体を育んでくれるものだと信じております。

コンテスト最優秀賞の表彰式で受賞者の小学校や幼稚園を訪問する機会がありますが、そこで出会う子どもたちからは、実際に海や川へ出かけてたくさんの自然体験をしているという話をよく聞きます。そのような体験をしている子どもたちの目はとても輝いていて、これからの子どもたちの将来がとても楽しみでもあります。

ぜひこれからも、このコンテストを継続して実施していただき、子どもたちが海や川などの自然に出かけて、その時に体験したこと、感じたことを、絵画という作品に残していけるよう、このコンテストを応援していきたいと考えております。

柳 敏晴 やなぎ・としはる

神戸常盤大学教育イノベーション機構長・教授、当財団理事、日本セーリング連盟(JSAF)普及指導委員会アドバイザー、日本海洋人間学会副会長

「十年一昔」

ヤマハ発動機スポーツ振興財団設立10周年おめでとうございます。

十年一昔とよく言われますが、本当にあつという間の気がします。この10年でYMFSが日本の国だけでなく海外にも影響を与えているのを先月実感しました。3月に上海体育学院を訪問した際、平成27年度海外留学生奨学金の郭叶舟(上海体育学院国際交流担当、当時筑波大学大学院)さんに会ったことです。YMFSのお陰で、研究をまとめることができ、現在があると言われていました。YMFSスポーツチャレンジ助成事業の成果の一つと言えます。

私は、YMFSの前身である日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)から、江口理事長、荒田理事長、松田さん、箱守さん、福原さん達と共に仕事をさせていただきました。YMFS設立当初は評議員、公益財団への変更後は理事として働かせていただいています。

報告書をふりかえると、財団の理念を解りやすい図で表現されているのが印象的です。当初の長谷川理事長、岸川事務局長のお考えだと思いますが、とても良い表現だと思っています。当初から、「しつこい(質濃い)」のは特徴でしたが、さらに質濃くなってきていると嬉しく思います。視点がユニークなもの大きな特徴です。当初から障害者スポーツに視点を置く点、表彰制度設置において、スポーツを支える縁の下の働きをしている人を表彰する点等、色々な工夫の中で、今の財団の価値が生まれてきたのだと考えます。木村理事長、杉本事務局長のもと始まった、「Next 5」、各種調査等、次々生まれてくる新しい試みは他のスポーツ振興財団とは違う特徴です。浅見先生がその中心として、質濃く、幅広く、深く関わられて、今の財団の特徴が生まれてきたのだと考えます。

チャレンジする気持ちを持ち続ける人材を育てることがこの財団の特徴ですが、担当される職員の皆様も、「次代のスポーツの指導者になって欲しい!」という気持ちで、仕事に取り組みチャレンジされているのが、色々な所に現れています。中間発表会を持ち、細かい点まで確認されているのもその一つです。調査をまとめるだけでなく、学会等と協働で発表されているのも大切な点です。海外で活躍していて参加できない人の発表を、ネットを通し行うのも質濃さの表れと考えます。YMFSが原点を大切にしているのも素晴らしい点だと思っています。JMPFが取り組んできたマリンスポーツの普及と展開については、葉山のヨットスクールを中心に、粛々と継続されています。海洋国日本として、海を通した教育は不可欠なものと考えますが、セーリングチャレンジカップを含め、社会教育の分野で重要な役割を果たされていると考えています。

チャレンジする心は、スポーツ選手に要求される「6Con」、Confidence(自信、確信)、Control(自制心)、Concentration(集中力)、Condition(身体力)、Consideration(熟慮、研究心)、Contemplation(熟視、観察力)で表現できると考えます。今迄財団の歩みに加えていただいていることを感謝するとともに、次世代を担うスポーツ関係者の発掘と育成を共に進めたいと願っています。



中森 邦男 なかもり・くにお

公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 強化部部长、日本パラリンピック委員会 事務局長

障がい者にとってスポーツの価値

障がい者にとってスポーツの価値は大きく三つ挙げることができる。

一つ目は、障がいにはスポーツ(運動)の日常化が必須である。

人間は運動による筋活動によって、その運動強度に耐えるように、その筋肉は維持され、また、強度を増していく。運動が少なく筋活動が低下すれば、その運動強度にあうように筋肉は弱くなる。運動不足が続くと、運動機能とともに全身の機能も衰え、食生活の乱れやストレスなどが重なると生活習慣病や糖尿病の発症につながる。障がい者の中でも肢体不自由者は、欠損や運動機能まひなどにより運動機能に問題を抱えているために、運動不足による障がい部位の筋力の低下が、すぐに日常生活や社会生活活動の低下につながる。その結果、生活習慣病、糖尿病の発症や寝たきりなどにつながる。

二つ目は、スポーツの段階によって自分自身に有効(成功体験、自信、前向きな気持ち、また、心を強く)に働きかける。

スポーツ参加当初は成功体験の連続(練習の量によってスポーツは上達し、強くなる)である。児童・生徒には本人の成長に運動負荷が加わり、より発育・発達を助長し、さらに競技力は向上する。チャンピオンスポーツでは、頂点に近づけば失敗体験(そう簡単に競技力は向上しない)の連続で、最新のスポーツ医学情報に関する課題に対するチャレンジとなり、その繰り返し心が強くする。障がい者にとっては、スポーツ参加当初の成功体験とスポーツの継続によって生まれる、前向きな気持ちと身体機能の強化が特に有効である。

三つ目は、スポーツによる障がい者の仲間づくりである。

同じ障がい者の先輩が目の前で見る競技パフォーマンス(格好いい、感動した、自分も同じようにできるかな、自分もやってみたい、自分も頑張ろうと)が大きな勇気を与えることである。そして、日常生活から社会生活に至るもろもろの課題に対し、先輩の障がい者からの温かいアドバイスによって、障がい者自身に未来に向けたチャレンジが生まれる。一般学校に通学している障がい児童・生徒、また、事故などで障がいが生じた場合の短期間リハビリテーションにより、障がい者同士のスポーツ活動の環境が少なくなっている。

これから期待することは、障がい者のグループによるスポーツ活動の拠点が全国に広がり、全市区町村にその拠点が存在し、障がい者が日常的にスポーツを楽しみ、その中から日本代表選手が生まれ、パラリンピックやデフリンピックなどでメダリストが数多く生まれることである。

伊坂 忠夫 いさか・ただお

立命館大学スポーツ健康科学部 学部長・教授、当財団理事 スポーツチャレンジ助成審査委員

『チャレンジする心と行動』を支えるYMFSのチャレンジ道場

YMFSとは何か？との問いに対して、設立当初からこれまで関わってきた小生が直感したイメージは、『チャレンジ道場』です。以下にその理由を説明し10周年の寄稿文とさせていただきます。

その1:『普通ではない密度の濃さ』

この道場に入門するには、チャレンジ助成の採択を受ける必要があります。通常の財団助成とは違い、書類選考のちに面接審査が待っています。チャレンジに相応しい内容であるかどうかだけでなく、「チャレンジする」という想いと本気を持っているかを偉い先生方が多数いる面接で確認されなければ、入門は許可されません。若いチャレンジャーは面接で相当な圧迫の中でも、しっかりと想いと夢をぶつけます。それを審査委員が真摯に受け止め、具体的なアドバイスを与えることは通例となっています。面接審査でありながら、若者を『ぶつかり稽古』させています。さらに、採択後も中間報告、最終報告の場面で、一段高い所へ引き上げるべく厳しくも的確な指摘がチャレンジャーに与えられています。このような密度の濃さは、浅見先生が発せられる「しつこい(質濃い)」の駄洒落に通じます。

その2:『チャレンジする心と行動』を生み出す仕掛け

このチャレンジ道場では、極めて高い目標へ向かうチャレンジャーに対してきめ細やかなサポートがされています。優れた最終製品をつくり出すには、工程管理が大事なとは言ってもありません。工場での工程管理に精通したYMFSスタッフは、チャレンジャーとやり取りして四半期ごとの目標設定とその到達確認を行っています。時には優しく、時には叱咤を入れながら、目標達成のためのコーチ(兄貴分)として活動しています。そして、全てのチャレンジャーの四半期報告に目を通し、コメントで激励されている浅見先生は、その道場主といっても過言ではありません。

その3:『チャレンジャー、関係者が一体となった鍛え合い』

YMFSのチャレンジ道場方式による「チャレンジャーを支え、鍛え、育てる」スタイルは、新しい財団助成のあり方を示したイノベーションです。チャレンジャー、YMFSスタッフ、審査委員などの関係者一同が、立場は違えども『チャレンジを愛する気持ち』を同じように持ち、ファミリーとしてチャレンジャーを育てるシステムができあがってきました。関係者の一人として、素晴らしい10年の営みと蓄積であると心より嬉しく感じております。

YMFSが今後も『最強のチャレンジ道場』としての機能を果たし、今後ともバージョンアップし続けることを心から願い、益々の発展を祈念申し上げます。



柳 弘之 やなぎ・ひろゆき

ヤマハ発動機株式会社 代表取締役社長、当財団評議員

ブランドスローガンを体現するYMFSの事業活動

ヤマハ発動機スポーツ振興財団は、ヤマハ発動機株式会社の50周年記念事業の一つとして平成18年に設立し、多くの関係者のご理解とご協力に支えられ、10年の節目を迎えることができました。出捐企業を代表して心から御礼を申し上げます。

ヤマハ発動機は、スポーツが持つ魅力や価値を早くから企業活動の原動力として採り入れ、事業に直結するモータースポーツやマリンスポーツはもとより、1972年にサッカー部(現・ジュビロ磐田)を、1982年にはラグビー部(現・ヤマハ発動機ジュビロ)を創部して、企業スポーツとして取り組んできました。以来、トップチームの強化を図りながら、地域に根差した積極的な普及・振興活動の展開により、いまでは多くの皆様に応援していただけるような存在に育っています。

そうした中、スポーツ振興を通じた人材育成を目指してスタートしたヤマハ発動機スポーツ振興財団も、平成21年には公益財団法人の第1号認定を受け、社会的責任を自覚しながら「事業の質」と「社会的な価値」の向上を目指して事業運営を行ってきました。決して大きくはない規模の財団ではありますが、協力いただいた皆様のお陰で独自性の高い、きらりと光る存在に育ってきていると感じています。

ヤマハ発動機グループは、“Revs your Heart”をブランドスローガンに、「世界中でヤマハと出会うすべての人々に、心躍る豊かな瞬間・最高の感動体験を届けたい」という思いを共有しています。当財団が掲げる「スポーツを通じて夢の実現にチャレンジする人を応援する」というビジョンや、それを具現化したそれぞれの事業活動は、まさにそのブランドスローガンを体現するものと考えています。

日本はこれから2019年ラグビーワールドカップ、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会など、国際的なスポーツメガイイベントをきっかけに、将来に向けて大きく変貌しようとしています。私たち企業が応援するこの財団も、そうした社会的背景のもとに独自の課題認識を大切に、ヤマハ発動機のチャレンジスピリットを活かした社会貢献の象徴的的事业として、高い志を持って、挑戦し続けてほしいと願っております。

関係者の皆様には、本財団の事業理念にご賛同いただき、末永くご指導をお願いいたします。

チャレンジのあゆみ 平成24年度▶28年度

平成28年度 (2016/2017)

- 第45代アメリカ大統領にドナルド・トランプ氏が就任
- 震度7の熊本地震が発生
- 第31回オリンピック競技大会(リオ)
- 第15回パラリンピック競技大会(リオ)
- 伊調馨選手(レスリング)が国民栄誉賞を受賞

リオオリンピック・パラリンピックに12名のチャレンジャーが出場
羽根田卓也選手(カヌー・スラローム)をはじめ、
両大会合わせて7つのメダルを獲得

平成27年度 (2015/2016)

- スポーツ庁を新設。鈴木大地氏が初代長官に就任
- 第18回冬季デフリンピック(ハンティ/マンシー)
- ラグビーワールドカップ2015(イングランド)で日本がグループリーグ3勝
- 次代のアスリートを支援するスポーツチャレンジNEXTを新設

平成26年度 (2014/2015)

- 第3次安倍内閣が発足
- 消費税8%がスタート
- 長野・岐阜県境の御嶽山が噴火
- 第22回オリンピック冬季競技大会(ソチ)
- 第17回アジア競技大会(仁川)
- 障害者スポーツのシンポジウムを神戸・東京で開催
- 指導サポート付きタグラグビーセットの提供を開始

平成25年度 (2013/2014)

- 富士山が世界遺産に登録
- 東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が決定
- 第6回東アジア競技大会(天津)
- 第22回夏季デフリンピック(ソフィア)
- デフリンピックで体験チャレンジャー3選手がメダル獲得

平成24年度 (2012/2013)

- アメリカ・オバマ大統領を再選
- 第30回オリンピック競技大会(ロンドン)
- 第14回パラリンピック競技大会(ロンドン)
- 吉田沙保里選手(レスリング)が国民栄誉賞を受賞
- 新たな事業として調査研究をスタート



平成24年度から調査研究活動をスタート。積み上げてきたその成果を社会に還元する取り組みとして、平成26年度からはシンポジウムを開催

事業の「質」のさらなる向上と、 新たな社会的価値の創出に挑んだ 「ふたまわりめ」

中期事業方針を策定 新たに調査研究活動を開始

新財団の立ち上げから5年。組織の基盤をつくり、主要な事業活動も軌道に乗り始めた。その5年の歩みをあらためて洗い直すとともに、総括のための議論を重ね、次なる5年を描き出す作業が繰り返された。そうしてまとめられたのが、中期事業方針「Next 5」だった。その骨子は、①事業の「質」向上、②新たな価値づくり、③事業のシナジー強化、というものだった。

新中期方針で目指したものは、まず、平成24年度からスタートした調査研究活動によって生み出された。

スポーツ振興にかかわる調査研究活動は、YMFSの発足間もない頃から検討されていた。しかし、その体制や具体的なテーマの設定については多くの議論を要することになった。一方、助成事業は5年の時間をかけて徐々に質を高め、その活動の中からスポーツ振興にかかわるさまざまな課題も見え始めていた。特に、1期生の山本篤選手を皮切りに、毎年、助成対象者に名を連ねてきた障害者スポーツの選手たちからは、トレーニング環境や国内外で開かれる各種大会への遠征費、また指導者をはじめとするサポート体制の不備などについての声が届いていた。

YMFSが取り組む調査研究のテーマに、障害者スポーツ、特にパラリンピックをはじめとする世界大会を目指すアスリートの育成・強化環境の現状を採り上げたのは、こうした背景によるものだった。やがて海老原修教授を委員長とする調査研究委員会が発足し、そのプロジェクトはスタートを切った。この経緯もまた「Next 5」で掲げた事業のシナジー効果の一つのかたちと言えた。

ロンドンパラリンピックを翌年に控えた調査研究活動は、多くの課題を浮き彫りにした。初年度は健常者のスポーツにおいてアスリートや指導者の育成で実績のある大学にアンケート調査を実施したが、回答を得られたのは協力を要請した学部・学科・コースのうち3分の1にも満たなかった。また、寄せられた回答からは、障害者アスリートの育成・強化のためのインフラ整備が進んでいないことが明らかとなった。

障害者スポーツをテーマにした調査研究活動は翌年度以降も継続され、平成25年度は「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」と「パラリンピック指導者の現状に関する調査」を実施した。また平成26年度には、これらの成果を社会に還元する取り組みとして初めてのシンポジウムも開催した。



事業の「質」向上の一環として、モデルエリアを設定した「指導サポート付きタグラグビーセットの提供」を開始



ロンドンで日本選手団が大活躍 そしてTOKYO 2020の開催が決定

2012年夏、ロンドンオリンピックでの日本選手団は、金メダル7個を含む史上最多の38個のメダルを獲得し、震災からの復興の途上にある日本に大きな希望を与えた。続いて開かれたパラリンピックでも日本ゴールボールチームが団体競技初の金メダルを獲得した。献身的な指導でチームを率いたヘッドコーチの江黒直樹氏には、この年のスポーツチャレンジ賞奨励賞が贈られている。

この大会には、スポーツチャレンジ体験助成の3期生・黒須成美選手(近代五種)、5期生・我孫子智美選手(棒高跳)、6期生・山崎勇喜選手(競歩)が出場。パラリンピックにも4期生・副島正純選手(車いすマラソン)をはじめ5選手が出場した。

ロンドンの盛り上がりは、東京2020オリンピック・パラリンピックの招致活動も加速させた。8月20日に東京・銀座で開かれたメダリストの凱旋パレードには、50万人もの人々が沿道から手を振った。この熱狂的な光景を記録した一枚の写真が、招致の成功に大きな役割を果たしたと言われている。翌2013年9月7日、ブエノスアイレスで開かれたIOC総会で東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が決定。長きにわたる招致活動を牽引した招致委員会戦略広報部には、平成25年度スポーツチャレンジ賞奨励賞が贈られた。

質を高めていったのは、新たな事業ばかりではない。ヤマハ発動機(株)、(財)日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)、そしてYMFSと引き継がれてきた「全国児童 水辺の風景画コンテスト」が、この年、25年目の節目を迎えた。平成元年からスタートした同コンテストは、水辺の絵を描くことで子どもたちの

海への理解・関心を深めてもらうことを目的としていた。

その一方で、海水浴をはじめとする水辺のレジャーから人々の足が遠のいていることが指摘され始めてもいた。特に幼児・児童教育の現場では、「危険」とされる水辺には近寄らないような指導も常態化していた。水辺をはじめとする自然に親しみ、そこにある暮らしや産業、棲息する生きものたちに興味を持つことで、自然の素晴らしさや怖さを知る——。そうした「体験」を促進する絵画コンテストという狙いをより鮮明に打ち出したのもこの頃だった。25回目の審査会を終えた工藤和男審査委員長は、「技術ばかりでなく、子どもたちが実際に水辺で体験したことをどのように表現しているか、そこを大切にできた」と語っている。

子どもたちの体力・運動能力の低下 その改善に向けたモデルづくり

スポーツ振興支援事業の一つ、「スポーツ教材の提供」もまた、ふたまわりめに入って質の向上を目指した。子どもたちの体力・運動能力の低下については長い間大きな課題とされてきたが、すべての子どもたちが外遊びやスポーツを好きなわけではない。「嫌い」「苦手」と感じる子どもたちに、「好き」「得意」と感じてもらえるような取り組みはできないのか? 着目したのがラグビーだった。

腰に付けた相手のタグを取ることでタックルの代わりとするそのゲームは、まるでボールを使った「鬼ごっこ」。サッカーや野球と較べて、性別・年齢・体力・運動能力・経験などによって競技力に差が付きにくいこの競技なら、スポーツを「嫌い」「苦手」と感じている子どもたちも活躍することができる。ヒーローになった子は、も

- ① ロンドンオリンピックに出発する黒須成美選手(近代五種)と我孫子智美選手(棒高跳)の健闘を願って激励会を開催
- ② チャレンジャー同士の相互刺激と化学反応を誘発する機会として、スポーツ討論会を実施
- ③ 強風と高い波に見舞われた伊豆大島外洋航海訓練。達成感を胸にホームマリナーの葉山に帰港
- ④ デフリンピック・ソフィア大会100mハードルで銀メダルを獲得した田井小百合選手を中間報告会で祝福
- ⑤ 北米CWWHLの強豪カルガリー・インフェルノで活躍する竹内愛奈選手。スマイルジャパンの中心選手として、平昌冬季オリンピックでの躍進が期待される
- ⑥ スポーツ用義足の第一人者、白井二美氏。走る喜びを多くの切断患者に伝えた功績により、第6回スポーツチャレンジ賞功労賞を受賞
- ⑦ ロンドンパラリンピックに出場したチャレンジャーたちを、「ともに頑張りましょう」と川口能活選手(当時・ジュビロ磐田)が激励
- ⑧ ロンドンパラリンピックのゴールボールで、日本女子が団体競技初の金メダルを獲得。江黒直樹ヘッドコーチにスポーツチャレンジ賞奨励賞が贈られた

高 遼 たかしま・はるか

スポーツチャレンジ体験助成 第4・5期生
(元アイスホッケー選手/三菱電機社員)

YMFS チャレンジャーとしての経験を、
スポーツ界のために。



高校生の時から、同世代の各国代表選手が活躍する姿に憧れ、いつか同じ環境で自分を高めたいと思っていました。その環境をYMFSに与えていただいたことに感謝しております。ヨーロッパでの3シーズン目を終える頃、第2の人生に進むことを決意しました。悔いがないと思えるまで挑戦をし、オリンピックの舞台に立つことと同等以上の価値のある経験が出来たことが引退の決め手となりました。

現在は、三菱電機の社員としてのミッションと、スポーツ界に恩返しするべく活動をしています。選手としてオリンピックの舞台に立つことは出来ませんでした。ソチではゲスト解説をさせていただきました。また平昌オリンピック最終予選では、JOCのアスナビを通じて選手を雇用する企業の皆様など、これまでに見たことのないたくさんの応援団が見守る中、NHK-BS放送に出演させていただきました。JOCに出向中、アスナビ担当として選手のキャリア支援に携われたこともチャレンジャーとしての経験があったからです。

2013年、YMFSの審査委員でありアイスホッケーを盛り上げてくださった今は亡き元NHK解説委員の西田善夫さんが、ソチでの放送を楽しみにしてくださっていました。次世代へと受け継がれる想いを大切に、チャレンジャーとしてこれからも挑戦し続けます。

しかし、その経験をきっかけに「好き」「得意」と感じることができるとも思えない。何より身体を動かす喜びや気持ちよさは、参加する子どもたちに等しく感じてもらえるだろう。それまでもスポーツ教材として提供してきたタグラグビーセットを用いて、新たに「指導サポート付きタグラグビーセットの提供」を開始した。

モデルとなったのは、YMFSの本拠地である静岡県西部地域の小学校。ヤマハ発動機(株)の協力を得て、同社ラグビー部・ヤマハ発動機ジュビロの選手やOBが近隣の小学校を巡回して児童や教員の指導にあたった。等しく汗をかき、等しく笑顔になれる。こうした活動の中から教育現場がタグラグビーの有用性を実感し、後に球技大会の種目にタグラグビーを採用したり、校技としてタグラグビーに取り組む事例も現れ始めた。やがてこの取り組みは「はじめてのタグラグビー教室」として拡充し、平成28年度までに合わせて25校・約2,500人の児童が参加している。

10年で積み上げた「成果の一端」 リオで躍動したチャレンジャーたち

一方、東京2020オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、行政やスポーツ界はその取り組みのピッチを上げていた。「TOKYO世代」と呼ばれるジュニア選手・ユース選手にも注目が集まった。

スポーツチャレンジ助成の新たなカテゴリーとして、次代を担う中学生以上のアスリートを対象とした「スポーツチャレンジNEXT」が加わったのは平成27年度のことだった。第6回スポーツ

チャレンジ賞奨励賞を受賞した東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会戦略広報部から、「未来のアスリートの育成に関わることに使っていただきたい」というメッセージとともに、賞金辞退の申し出があったことがきっかけだった。こうして、申請時中学3年生であった3人の若きアスリートを第9期生として迎え入れた。

スポーツチャレンジ助成は、それぞれの時代背景やその実態を反映させながら、継続助成を取り込むなど幾度かの制度の改良・改善を繰り返してきた。その始まりから10年が経過したタイミングで開かれたリオオリンピック・パラリンピックは、歴代助成対象者たちのチャレンジの成果が見事に花開いた大会となった。

1・2期生の大槻卓氏は男子7人制ラグビーの審判として11試合を担当し、8期生のサヤラット・ポンナリー氏(ラオス)は母国柔道チームのコーチとして大会に参加した。7期生の羽根田卓也選手は、アジアの選手として初めてカヌースラロームで銅メダルを獲得し、国民的な注目を集めるまでになった。またパラリンピックでは、YMFSチャレンジャー4人で挑んだ4×100mリレーで銅メダルを獲得したほか、陸上・女子400mでも10期生の辻沙絵選手がやはり銅メダルを獲得した。リオオリンピック・パラリンピックに参加したチャレンジャーは、選手・指導者・審判合わせて12名にも及んだ。

まだ若い財団にとって、ふたまわりめに位置づけられた平成24度からの5年間は、理によって事業の「質」向上にチャレンジした第二の成長期と言えた。そして次なる5年に向けて組織と事業の検証を行い、次期中期事業方針「Active 5」を策定した。

瀬戸 邦弘 せとくにひろ

スポーツチャレンジ研究助成 第6・7・8期生

素敵な仲間たちとともに 「しつこい夢の構築空間」を



YMFSにお世話になった3年間を振り返って思い出すこと、それはYMFSの「きめ細やかなサポート」、浅見先生のお言葉を借りれば「しつこい(質濃い)」フォローとなります。財団は助成期間を通してチャレンジャーに常に「チャレンジの質」を問い続けます。四半期ごとに求められる報告や真夏に一堂に会する中間発表など多くの課題が課されますが、その中でも際立つ存在が2泊3日で行われる「つま恋」での成果報告会でした。これは、チャレンジャー個々の成果を発表する「だけ」ならば長すぎるとも感じられますが、それは同時にこの場が単なるセレモニーではないことを物語っています。一度も会ったこともない、世代もテーマも違うチャレンジャーと相部屋で、昼は研究発表、夜は部屋で夜半まで議論というハードな時間を過ごし、研究者は競技者の純粋さとストイックさを、競技者は研究者の志とモノゴトの奥行きを知ることになります。つまり、YMFSの助成とは単に個々人が「目に見える」成果をあげるだけでなく、チャレンジャーが多様な価値に触れ、世界の広さを知る「きっかけ」を与えることも重要な目的なのです。したがって、YMFSの報告会とはチャレンジャーにとり挑戦のゴールではなく、新たな長い道のりのスタートともなるのです。ところで、YMFSの標榜するチャレンジにはいつも「夢」という言葉が登場しますが、これは個々人の夢だけではなくこのような過程を経てチャレンジャーが協力して新たに構築し得る「社会でみる夢」ではないかと思っています。私個人は、これからも個人の課題に真摯に向かい合うのはもちろんのこととして、ここで出会った素敵な仲間とともに「社会がみる夢」を構築できるように歩み続けられたら幸甚です。今後も微力ながらこの素敵な「しつこい夢の構築空間」のために協力していきたいと思っています。

- ① ジュニアヨットスクール葉山の浜名湖夏季合宿。夕食後に開かれる勉強会では、学年や居住地が異なる子どもたちがともに楽しく学ぶ
- ② 「学べるレガッタ」として生まれ変わったセーリング・チャレンジカップ。ジュニア・ユース年代における国内トップクラスの指導者が講師を務める
- ③ リオオリンピックのカヌースラロームで銅メダルを獲得した羽根田卓也選手。スポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングでは、スロバキアにおけるトレーニングの日々を報告
- ④ 障害者スポーツにかかわる調査研究は、報告書の発行、シンポジウムの開催、そして体験会の実施と活動を拡充
- ⑤ スポーツチャレンジNEXTの神宮漢心選手(ビリヤード/スヌーカー)は、中国に渡って武者修行
- ⑥ 水辺の体験学習でラフティングに挑戦した葉山スクールの子どもたち
- ⑦ 「全国児童 水辺の風景画コンテスト」は歴史を重ね、理解者や支援者がさらに拡大。俳優であり画家でもある国広富之氏も審査員に加わった
- ⑧ 大学生でありながら、コンゴ民主共和国でアルティメット(フリスビー)競技の普及に尽力し、同国代表チームの監督も務めた大川晴氏





海老原教授を委員長とする調査研究委員会を発足。その初年度は「大学における障害者スポーツの現状」についてアンケート調査を実施した。障害者スポーツに関する調査研究は、その後も継続されている

事業活動を通じて見えた課題 「障害者スポーツ」をテーマに、 調査研究活動がスタート。

この年から、スポーツ文化・啓発事業の新たな取り組みとして、スポーツ振興にかかわる調査研究活動がスタートした。初年度にあたる平成24年度は、海老原教授(横浜国立大学 教育人間科学部)を委員長とする調査研究委員会を発足した。

平成23年に国が制定した「スポーツ基本法」および「スポーツ基本計画」の中で、障害者スポーツに関する記述が格段に増えた一方、それまで事業活動を通して理解を深め合ってきた障害者スポーツの選手や指導者、関係者からは、十分とは言えない育成・強化環境についての意見も聞かれていた。また国民の理解や関心もまだ低く、ロンドンパラリンピックを控えた関連報道も決して多いとは言えなかった。

新たに取り組む調査研究活動のテーマとして、障害者スポーツ、特にパラリンピック等の世界大会を目指す「アスリートの育成・強化環境の現状」の把握を掲げたのはこうした背景によるものだった。その具体的な取り組みとして、健常者アスリートや指導者の育成で実績のある大学を対象に「大学における障害者スポーツの現状」についてアンケート調査を行った。

アンケートを依頼した153大学の167学部・学科・コースのうち、51学部から回答を得てその分析を行った。結果、「障害者スポーツ選手に対する特別推薦制度がある大学・学部は5.9%」「障害者スポーツ選手のためのコーチ養成を実施しているのは2.0%」「バリアフリーに対応している体育館メインアリーナは20.4%」というものだった。

こうした調査結果を受け、海老原委員長は「オリンピックとパラリンピックがセットで議論されるグローバル・スタンダードにあって、この結果をいかに解釈するか」「体育やスポーツにおけるインクルージョン推進・実現に向けてこの調査で戦端を切りたい」と話した。障害者スポーツに関する調査研究は次年度以降も継続され、平成26年度には初めてのシンポジウムも開催した。

2012 / 2013 平成24年度

ロンドンオリンピック日本選手団が、金メダル7個を含む史上最多の38個のメダルを獲得。またパラリンピックでは、ゴールボールで団体競技初の金メダルを獲得した。8月20日に東京・銀座で開かれたメダリストの凱旋パレードでは約50万人が沿道を埋め尽くし、東京2020オリンピック・パラリンピック招致への機運を加速させた。一方、スポーツ指導の現場における体罰が社会的な問題としてクローズアップされた年でもあった。

スポーツチャレンジ助成事業

ロンドンオリンピックにはOGチャレンジャーの黒須成美選手(近代五種)ら3選手が、パラリンピックには副島正純選手ら5選手が出場し、大会前に激励会を開いて特別チャレンジャー賞を贈呈した。また、年度末のスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングでは、JAXAの川口淳一郎氏を招いて特別講演「はやぶさが挑んだ人類初の往復宇宙飛行」を開き、一般参加の約200名が来場した。



■平成24年度(第6期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	53件	10件	890万円
研究助成	97件	12件	1,130万円
奨学生	17件	4件	480万円(1年分)
計	167件	26件	2,500万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

スクール生が16名に増え、葉山マリーナでのセーリング練習に加え、恒例行事となった浜名湖での夏季合宿、伊豆大島外洋航海訓練などの活動が行われた。7月22日に開かれた水辺の安全学習では、日本ライフセービング協会のインストラクターの指導により、「自分の命を自分で守る」知識と技術を養った。



■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

全国20クラブから62隻・78選手が参加。東日本大震災で被災した宮城県気仙沼高校の選手2名と指導者1名が、輸送費の補助や参加費の免除を受けて参加した。

■スポーツ教材の提供

858件の申請の中から182団体にサッカーボールセット、タグラグビーセットを提供した。この中には、東日本大震災被災地の学校等82団体が含まれていた。また、磐田市立東部小学校(静岡)では、タグラグビーセットを使ってヤマハ発動機ジュビロの選手による指導が行われた。



■全国児童 水辺の風景画コンテスト

募集テーマを「水辺の遊び・水辺体験」「港湾・船舶・河川」「環境・自然・生物」「漁業・漁港・漁船」の4部門に変更。全国755団体から9,097点の応募が寄せられた。

スポーツ文化・啓発事業

■第5回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

【功労賞】樋口 豊氏
国際的な信頼と幅広いネットワークを活かし、日本フィギュアスケートの「開国」に貢献



【奨励賞】江黒 直樹氏
「楽しいハビリススポーツ」の普及を目指した 日本女子ゴールボールチーム金メダルへの挑戦



■調査研究

スポーツ振興に関わる調査研究がスタートした。「大学における障害者スポーツの現状に関する調査研究」を行い、報告書を発行するとともに、外部の専門家とともに「海辺の自然体験学習の教育的効果」に関する共同研究も実施した。



水辺での体験を促進し、その体験を描くことで子どもたちの感性を育むことを目的とする「全国児童 水辺の風景画コンテスト」。受賞者のもとを訪ね、その様子をレポートするなど趣旨の浸透を図っている

水辺に親しむ子どもたちを増やしたい、 感性と可能性を拡げたい。 水辺の風景画コンテスト25周年。

「全国児童 水辺の風景画コンテスト」がスタートしたのは平成元年のこと。(財)日本マリンスポーツ普及教育振興財団(JMPF)と(社)フィッシャリーナ協会の後援を得て、ヤマハ発動機(株)が主催する「ヤマハ全国児童 浜の風景画コンテスト」としてスタートを切った。第9回コンテストの開催より主催団体がJMPFに移り、そのJMPFから事業を引き継いだYMFSが第19回から主催している。現在ではおよそ1万点もの作品が寄せられる同コンテストだが、第1回の応募作品は1,558点だった。工藤和男氏(創元会理事長・日展評議員/当時)は、その第1回コンテストから審査員長を務めている。

水辺の絵を描くことによって、海への理解や関心を深め、同時に子どもたちの地球環境保護意識を育もうとスタートした同コンテスト。日本の子どもたちはもちろん、一時はワールド・チルドレンズ・ファンド・ジャパンの協力を得て、トルコやアゼルバイジャン、メキシコ、インドネシアなど世界の子供たちから各国の水辺の風景が寄せられた時代もあった。

25周年を迎えた平成25年度の募集では、全国の幼稚園・保育園、小学校、絵画教室などから合わせて9,842点の作品が寄せられ、その最終審査会で工藤審査員長は「(25回の歴史の中で)これまで素晴らしい作品に出会ってきた。選考にあたっては、技術だけでなく、子どもたちが実際に水辺で体験したことをどのように表現しているか、そこを大切にしてきた。それを見極めるのは難しいことだが、審査の楽しみにもなっている」と語った。

YMFSでも、この「水辺での体験促進」を開催の主旨に据え、受賞者のもとを訪ねて水辺に親しむその様子をホームページでレポートしている。こうした活動を続けることでコンテストの主旨が回を追うごとに浸透し、作品に添えられた水辺での楽しい体験談や作品に込めた思いを読むことも、審査員の大きな楽しみの一つになっている。

2013 / 2014 平成25年度

9月7日、プエノスアイレスで開かれたIOC総会で東京2020オリンピック・パラリンピックの開催が決定。スポーツ界をはじめ、日本にとって新たな、そして大きな目標に向けた歩みがスタートした。またブルガリア・ソフィアで開かれたデフリンピックでは、3人の体験チャレンジャーがメダルを獲得。第6回東アジア競技大会(中国・天津)でも複数のチャレンジャーが活躍した。

スポーツチャレンジ助成事業

ソチオリンピックには、スケート・女子ショートトラックの2選手が出場。また、デフリンピック・ソフィア大会では、世界ろうジュニア新記録(3m00)を跳んだ棒高跳の佐藤麻梨乃選手をはじめ3名の体験チャレンジャーがメダルを獲得した。年度末のスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングでは、坂牧政彦氏による特別講演「東京2020オリンピック・パラリンピック開催を受けて」が開かれた。



■平成25年度(第7期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	54件	11件	934万円
研究助成	73件	13件	1,205万円
奨学生	22件	3件	360万円(1年分)
計	149件	27件	2,499万円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

7月31日~8月4日、(一社)日本ジュニアヨットクラブ連盟との合同で4泊5日の浜名湖夏季合宿を実施した。ロンドン五輪470級日本代表の原田龍之介選手らが特別講師として指導を行った。



■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

全国18クラブから78艇・103選手が参加。大会を通して北西の強風が吹き、瞬間最大風速が18m/秒を超えた初日のレースは中止となった。

■スポーツ教材の提供

1,131件の申請の中から177団体にスポーツ教材を提供した。この中には、子どもたちのスポーツ機会が著しく減少している被災3県(岩手・宮城・福島)の57団体が含まれ、通常のスポーツ教材とは別に申請のあった教材を提供した。



■全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国から9,842件の作品が寄せられた。例年に比べて未就学児童からの応募が増え、幼稚園・保育園での水辺体験活動が増加していることがうかがえた。

スポーツ文化・啓発事業

■第6回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

【功労賞】白井 二美男氏
スポーツ用義足開発の第一人者として「走る喜び」を提供する挑戦



【奨励賞】東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会 戦略広報部
戦略広報という立場から東京2020招致を支えたプロフェッショナル



■調査研究

パラリンピック出場選手を対象に競技環境や経済環境を調査する「パラリンピアンへのスポーツキャリアに関する調査」及び「パラリンピック指導者の現状に関する調査」、平成24年度から継続する「パラリンピック競技団体活動調査」を実施し、この3編から構成する報告「我が国のパラリンピアンを取り巻くスポーツ環境調査」をまとめた。



性別・年齢・体力・運動能力・経験等によって競技力に差のつきにくいタグラグビーに着目し、「指導サポート付きタグラグビー教材の提供」をスタート。初年度は静岡県西部地域の小学校5校で実施した

「運動が苦手」という子どもたちに 身体を動かすことの楽しさを、 タグラグビーで!

子どもたちの体力・運動能力の低下について、日本体育協会は「時間・空間・仲間の減少」という3点を大きな原因としてあげ、一方、文部科学省では毎日60分以上身体を動かすことを推奨している。しかし、すべての子どもが外遊びやスポーツを好きなわけではない。YMFSでも、「苦手」「嫌い」と感じる子どもたちがスポーツを好きになるためには? という議論を繰り返してきた。

そこで着目したのが、ラグビーのルールを基本にしたタグラグビーだった。腰に付けた相手のタグを取ることでタックルの代わりにするそのゲームは、まるで「ボールを使った鬼ごっこ」。性別・年齢・体力・運動能力・経験等によって競技力に差のつきにくいタグラグビーの特性を用いて、この年から「指導サポート付きタグラグビー教材の提供(後に「はじめてのタグラグビー教室」に改称)をスタートした。初年度は、静岡県西部地区をモデルエリアに定め、地域の小学校5校(児童283名・教員27名)を対象に実施した。

指導サポートを行うのは、ヤマハ発動機(株)スポーツ推進グループの協力を得て、同社ラグビー部、ヤマハ発動機ジュビロの現役選手やOBたち。3年目の平成28年度には「運動に苦手意識を持つ子どもたちが、タグラグビーを通じて楽しめるようになるか?」を検証するため、教員への指導(1回)と児童への指導(3回)を行い、合わせてアンケート調査を実施した。

「指導の中では、どの子も笑顔でタグラグビーを楽しんでいた」「一つのトライが『僕、スポーツが好き!』というスイッチになることもあるはず」。そう話したのは指導を行った現役ラグビー選手。対象となった小学校の中には、球技大会の種目としてタグラグビーを採用した学校や、校技としてタグラグビーに取り組む学校も現れ始めている。

2014/2015 平成26年度

第3次安倍政権が発足。消費税8%がスタートした。ソチで開かれたオリンピック・パラリンピック、ブラジルで開かれたFIFAワールドカップでの日本選手・チームの活躍に加え、全米オープンテニスでの錦織圭選手の準優勝が大きな話題となった。スポーツ行政の一元化やスポーツ庁創設に向けた議論も進捗した。

スポーツチャレンジ助成事業

ソチオリンピックには2人のOBチャレンジャーが出場したほか、リオオリンピックでメダルの獲得を目指すカヌー・スラロームの羽根田卓也選手が、韓国・仁川で開かれたアジア大会で優勝を飾った。3月に開催した第8回スポーツチャレンジャーズ・ミーティングでは、体験1期生のアドベンチャーレーサー田中正人氏と、「日本百名山ひと筆書き」の田中陽希氏が特別講演を行った。



■平成26年度(第8期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	44件	14件	1,326万755円
研究助成	54件	14件	1,306万8,000円
奨学生	16件	4件	480万円(1年分)
計	114件	32件	3,112万8,755円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

10月19日に開催した保護者会では、保護者の皆さんが観覧艇から海上練習や模擬レースを見守ったほか、終了後には懇親のためのバーベキューパーティーを開催した。



■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

従来のOP級、ミニホッパー級、FJ級に加え、新種目として国際420級とレーザー4.7級の5クラスを開催。全国36クラブから102隻・147名の選手が参加した。大会期間中には特別コーチを招いてGPS航跡データの活用などを学んだ。

■スポーツ教材の提供

「スポーツ機会の充実に向けた新たな取り組みを計画している団体」を対象に募集を行い、928件の申請の中から抽選で125団体にスポーツ教材を提供した。また被災3県から申請のあった53団体に対して、被災状況を個別に確認のうえ、既定の提供枠とは別に被災地支援としての提供を行った。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国から9,149名の作品が寄せられ、入賞作品510点、入賞作品37点を決定した。入賞作品はジャパンインターナショナルポートショー2015の会場に展示した。

スポーツ文化・啓発事業

■第7回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

〔奨励賞〕 妻木 充法氏
公正なジャッジを支える「鍼治療」の技術



〔奨励賞〕 門田 正久氏
障害者アスリートのメディカルサポート環境を拡充する取り組み



■調査研究

平成24年度から取り組んでいる障害者スポーツをテーマにしたシンポジウムを、神戸と東京の2か所で初開催した。シンポジウムでは、海老原修調査研究委員長による「日本のパラリンピック選手強化の課題と現状」の調査報告に続き、パネラーからは「選手の立場からの競技力向上」「各競技団体の現状と課題」「政府や自治体のスポーツ政策」「選手の生活を支える企業のあり方」についての報告が行われ、障害者スポーツ環境の向上及び、世界で活躍するアスリートの育成・支援について活発な意見交換が行われた。



左からラグビーのブラウン健人マシュー選手、水泳の上垣光選手、古畑海生選手。ワールドカップ、パラリンピック、オリンピックと目標は異なるが、「絶対に負けたくない!」と口を揃えた

次代の日本スポーツ界を牽引する 若手チャレンジャーのために、 スポーツチャレンジNEXTを新設。

スポーツ界の「縁の下の力持ち」を讃えるヤマハ発動機スポーツチャレンジ賞。その第6回奨励賞を受賞した東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会戦略広報部から、「未来のアスリートの育成に関わることに使っていただきたい」というメッセージとともに、賞金辞退の申し出があった。その200万円を原資として、スポーツチャレンジ助成に「スポーツチャレンジNEXT」が新設された。

その最初のNEXTチャレンジャーとなったのが、写真のブラウン健人マシュー選手、上垣光選手、古畑海生選手。3人はこの年揃って高校に進学し、ラグビーワールドカップ、パラリンピック、オリンピックというそれぞれの目標に向けてチャレンジを開始した。

それに先立って参加したスポーツ・チャレンジャーズ・ミーティングでは、国内トップクラスのアスリートや幅広い分野の研究者と3日間寝食を共にし、「今まで感じたことのないような刺激を受けた」(古畑選手)、「グループワークでは、パラリンピックで金メダルを獲得という僕の目標を実現するために、一流の人たちが本気で考えてくれた。ドキドキしたし、ワクワクした」(上垣選手)と顔を紅潮させた。

マシュー選手は20歳でラグビーワールドカップ日本開催を迎える。「その頃はきっと大学生。もちろんジャパンのセンターとして活躍するつもり」と目を輝かせ、21歳で東京2020オリンピック・パラリンピックを迎える上垣選手と古畑選手は「メダルを獲得」「必ず実現する」と力強く語った。3人はともに所属する高校で地力をつけ、着実な成長を遂げている。

競技は異なるものの、YMFSのプログラムを通じて交流が始まった未来を担う若者3人。互いの存在をどう思っているかと尋ねてみると、「仲間。そして絶対に負けたくないライバル!」と口を揃えた。

2015/2016 平成27年度

10月1日、文部科学省の外局としてスポーツ庁が設置され、鈴木大地氏が初代長官に就いた。イングランドで開催されたラグビーワールドカップでは、日本が強豪・南アフリカを破るなどグループリーグで3勝を挙げ世界を驚かせた。熊本では震度7の地震が発生し、犠牲者は160人を超えた。

スポーツチャレンジ助成事業

リオオリンピック・パラリンピックの選考イヤーにあたり、各チャレンジャーが目標に向かって全力を尽くした。その結果、オリンピックに選手2名、審判1名、コーチ1名、パラリンピックに8名の選手の出場が決定した。



■平成27年度(第9期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	47件	14件	1,368万2,800円
研究助成	54件	11件	1,015万500円
NEXT	5件	3件	150万円
奨学生	9件	4件	720万円(1年分)
計	115件	32件	3,253万3,300円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

36名のスクール生が通年型のセーリング指導に加え、伊豆大島外洋帆走訓練、浜名湖夏季合宿など自然・水辺体験プログラムに取り組んだ。また、2月にオーストラリアで開かれた国際交流レースにスクール生が参加した。



■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

NPO法人静岡県セーリング連盟との共催で開催。全国34クラブから119名の選手が参加した。レーザー4.7級が世界選手権代表選考会を兼ねたほか、国内トップレベルの講師陣を招いての技術指導や勉強会で「学べるレガッタ」の色をさらに濃くした。



■スポーツ教材の提供

935件の申請があり、抽選を経て120団体にスポーツ教材を提供した。また5年目となる東日本大震災被災地への支援では、65団体に教材を提供した。「指導サポート付きタグラグビー教材の提供」は2年目を迎え、ヤマハ発動機(株)の協力のもと9校に対して実施した。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

全国の689団体から8,763作品が寄せられた。これらの作品の中から、入選501作品、入賞37作品が決定した。



スポーツ文化・啓発事業

■第8回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

〔功労賞〕 藤原 進一郎氏
「すべての障がい者の生活にスポーツを——」
その信念を貫いた40年



〔奨励賞〕 中島 正太氏
先端技術駆使したデータ分析で、ラグビー日本代表の躍進に貢献



■調査研究
4年目となる障害者スポーツ分野から「障害者スポーツ選手発掘・育成システムのモデル構築に向けた基礎的調査研究」を、新たに「トップスポーツの現状と課題に関する研究—ラグビーフットボールに関する社会的認知と観戦行動の基礎調査—」に取り組み、両件の調査結果を報告書にまとめた。また、調査結果の社会活用促進を目的にシンポジウムを開催したほか、障害者スポーツの社会的認知向上を目的に、小・中学生を対象に障害者スポーツ(車椅子バスケットボール)体験イベントを初めて開催した。





パラリンピック終了後の報告会で、合わせて6個のメダルを浅見審査委員長の首にかけた。「チャレンジは目標がある限り続く。東京2020パラリンピックではさらに上を目指してほしい」と激励を受けた

チャレンジ助成10年目。 歴代のOBチャレンジャーが、 リオで咲かせた大きな花。

スポーツチャレンジ助成10年目。その成果の一端が、リオオリンピック・パラリンピックの両大会で花を咲かせた。

オリンピックに出場したのは、カヌースラロームの羽根田卓也選手と、女子7人制ラグビーの山口真理恵選手。また男子7人制ラグビーの審判として大槻卓氏が、奨学生のサヤラット・ポンナリー氏はラオス男子柔道のコーチに選出された。一方パラリンピックには田中康大選手(水泳)、山本篤選手、多川知希選手、副島正純選手、佐藤圭太選手、芦田創選手、鈴木徹選手、辻沙絵選手(以上陸上)の8選手が出場した。

大会直前に開かれた壮行会で、「個人の100mはまだ力不足。でもリレーはメダルを獲りに行く。YMFSファミリーの4人でバトンをつないでメダルを持ち帰れば、これ以上の恩返しはないから」と話したのは芦田選手。その言葉どおり銅メダルを獲得し、山本選手が走幅跳で獲得した銀メダル、辻選手が400mで獲得した銅メダルと合わせ、帰国後の報告会で浅見俊雄審査委員長の首に合計6個のメダルをかけた。

オリンピックでは、女子7人制ラグビーで10位になったサクラセブンスの山口選手が3トライをあげる活躍を見せ、レフリーの大槻氏は合計11試合を担当した。カヌースラローム競技でアジア初の銅メダルを獲得した羽根田選手は、その偉業によってメディアの注目を集め、「オリンピックでメダルを獲る」「カヌースラロームという競技をたくさんの人に知ってもらおう」という目標をともに成し遂げた。

帰国後の報告会では、祝福の言葉とともに「チャレンジは目標がある限り続くもの。東京2020パラリンピックではさらに上を目指してほしい」と浅見審査委員長から激励を受け、オリンピック・パラリンピックに出場/参加した12名全員に審査委員長奨励賞が贈られた。

2016 / 2017 平成28年度

アメリカ大統領選挙でドナルド・トランプ氏が当選。第45代アメリカ大統領に就任した。リオオリンピックではカヌースラロームの羽根田卓也選手が銅メダルを獲得。またパラリンピックでは陸上男子4×100mで体験チャレンジャーの4選手が銅メダルを、山本篤選手が走幅跳で銀メダルを、辻沙絵選手が陸上女子400mで銅メダルを獲得した。

スポーツチャレンジ助成事業

2020東京オリンピック・パラリンピックという新たな目標ができたことで、チャレンジャーが大幅に若返った。採択された体験チャレンジャー(NEXT含む)のうち、競技者の平均年齢は18.4歳。一方、研究チャレンジャーも20代の3名を含む平均32.3歳という若さだった。夏にはリオオリンピック・パラリンピックが開催され、OBを含む合計12名のチャレンジャーが活躍した。



■平成28年度(第10期生)助成概要

	申請数	採択件数	助成金額
体験助成	34件	12件	1,175万1,027円
研究助成	56件	15件	1,292万6,500円
NEXT	6件	4件	199万8,500円
奨学生	10件	2件	480万円(1年分)
計	106件	33件	3,147万6,027円

スポーツ振興支援事業

■ジュニアヨットスクール葉山

夏休みに開かれた「国際交流日本ジュニアヨットクラブ競技会」「全国中学校ヨット選手権大会」「東日本OP級セーリング選手権」に加え、海外で行われた国際大会「レーザー4.7級世界選手権」「レーザーU-21世界選手権」に多数のスクール生が出場した。全国中学選手権では、須永笑顔選手(中2)が女子優勝を果たした。

■セーリング・チャレンジカップIN浜名湖

全国36クラブから128隻・162名の選手が参加した。最優秀選手に贈られる荒田忠典メモリアルカップは、レーザー4.7級で優勝した桐井航汰選手が獲得した。

■スポーツ教材の提供

862件の申請の中から146団体の提供先を決定。申請比率の高かったタグラグビーセットについては、提供先を60団体から75団体に拡大した。ワールドカップでのラグビー日本代表の活躍によって、取り組んでみたいと考える指導者や子どもたちが増加したものと考えられる。

■全国児童 水辺の風景画コンテスト

初めて1万点を超え、過去最高の10,321作品が全国から寄せられた。またコンテストの趣旨への理解・賛同がさらに進み、新たに独立行政法人国立青少年教育振興機構の後援に加え、俳優であり画家でもある国広富之氏が審査員に加わった。「外に出て感動を味わうこと、その感動を自分の手で表現していくという経験。この二つのことの大切さを審査会の中でずっと感じていた」と国広氏。

スポーツ文化・啓発事業

■第9回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞



【功労賞】今村 大成 氏
日本若手卓球選手の武者修行を支え続ける「デュセルドルフの父」



【奨励賞】野口 智博 氏
障害者スポーツ全体の課題に先鞭をつけた挑戦 ~トップ選手の指導からパラアスリート強化の現場へ~

■調査研究

テーマ毎に分けた2つのプロジェクトを推進した。障害者スポーツ・プロジェクトでは、藤田紀昭氏をリーダーに「障害者スポーツを取り巻く社会課題研究」を継承し、新たに「社会的認知度とメディア報道の関連性」等に取り組んだ。またトップスポーツ・プロジェクトでは、岡本純也氏をリーダーに「トップスポーツによる地域スポーツ環境への貢献」をテーマとして、「トップスポーツ関係者や試合観戦者調査」等に取り組んだ。両プロジェクトの活動成果は年度末に報告書にまとめて刊行した。

事務局長の回想

子どもたちやチャレンジャーの 笑顔を中心に



杉本 典彦
前事務局長

私自身は設立5年目の平成23年からYMFSに携わってきました。折しもこの年の3月11日に東日本大震災、福島第一原発事故。未曾有の災害による混乱の中、被災地の復旧、復興に日本全体が動きだした年でもありました。また、8月スポーツ基本法施行、翌3月スポーツ基本計画策定、その後の東京2020オリンピック・パラリンピック開催決定、スポーツ行政の一元化と強化を目指したスポーツ庁設置など、この5年間にはスポーツ振興に関わる環境が大きく変わっていく節目の期であったと思います。

こうした変化の中であって、我々のような規模の財団がどのような方向を目指すのがいいのか、少しでも社会のお役に立ち、できるならば小さくても社会が動きかけになるような仕事ができないかなど、いつも自問自答していた毎日でした。まずは公益法人として事業の安定性、持続性を確保しつつ、民間企業を母体とする財団として柔軟性や創意工夫。母体企業の特徴をどう活かすか。中期事業方針Next 5をキーワードに財団の内側と外側を再確認しつつ、オリジナリティを磨き、着実に進化させていくことに努めてきました。

具体的には、更なる「事業の質向上」と「新たな社会的価値づくり」を方針に掲げ、①チャレンジ助成では国のサポートが薄い分野の若いアスリートや研究者の支援。異分野交流など経済的支援以外での価値も含めたフォローアップの定着。②子どもたちを対象とする事業では、一人でも多くの子どもたちや指導者にスポーツの楽しさを実感してもらいたい。③社会啓発に関わる事業では、スポーツチャレンジ賞受賞者の功績をもっと広く社会に知って貰いたい。調査研究では障害者スポーツの現状や課題に腰を据えて取り組み、現場の環境改善に少しでもお役に立ちたい。そんな思いや課題を関係者の皆さんと共有し取り組んできました。

お陰さまで現在YMFSの事業は、内外含めご賛同いただく100名を超える協力者の皆様が支えて下さっています。その皆様が「面白い」、「楽しい」と共感し、笑顔があふれる活動になればと思っています。そして、葉山や浜名湖のセーリングやタグラグビー、水辺の風景画コンテストなどにチャレンジされた子どもたち。これまで応援してきた延べ300名を超える助成チャレンジャーの皆さんが逞しく成長され、それぞれの分野で中心になって生き生きと活躍している姿を見ることができ、彼らからその様子を直接聞くことができれば、YMFSスタッフはもとより、ご協力下さる多くの皆様も、きっと喜んで下さることと思います。

平成19年度▶28年度 事業推進体制

■ 理事／監事／評議員／評議員選定委員／事務局(事務局長／職員)

敬称略

役職名	2006年												2007年												2008年												2009年												2010年												2011年												2012年												2013年												2014年												2015年												2016年												2017年																							
	平成18年度												平成19年度												平成20年度												平成21年度												平成22年度												平成23年度												平成24年度												平成25年度												平成26年度												平成27年度												平成28年度																																			
代表理事(理事長)	長谷川 至																																																																																																																																				木村 隆昭																							
業務執行理事(常務理事)	岸川 善次郎																																																																																																																																				杉本 典彦												大庭 義隆											
理事	塩谷 立																																																																																																																																																											
	柳澤 伯夫																																																																																																																																																											
	古橋 廣之進																																																																																																																																																											
	岡崎 助一																																																																																																																																																											
	戸田 邦司																																																																																																																																																											
	書馬 輝夫																																																																																																																																																											
	梶川 隆																																																																																																																																																											
	清水 紀彦																																																																																																																																																											
	関根 謙一																																																																																																																																																											
	山村 正一																																																																																																																																																											
	木沢 裕一																																																																																																																																																											
	佐藤 潤																																																																																																																																																											
	花内 誠																																																																																																																																																											
	浅見 俊雄																																																																																																																																																											
	柳 敏晴																																																																																																																																																											
伊坂 忠夫																																																																																																																																																												
伊藤 宏																																																																																																																																																												
勝田 隆																																																																																																																																																												
橋川 隆																																																																																																																																																												
平 忠彦																																																																																																																																																												
鈴木 大地																																																																																																																																																												
加賀谷 淳子																																																																																																																																																												
定本 朋子																																																																																																																																																												
西田 善夫																																																																																																																																																												
田原 淳子																																																																																																																																																												
千足 耕一																																																																																																																																																												
戸上 常司																																																																																																																																																												
鈴木 正人																																																																																																																																																												
橋本 義明																																																																																																																																																												
齋藤 順三																																																																																																																																																												
監事	田宮 紳司																																																																																																																																																											
小西 由人																																																																																																																																																												
樋上 芳昭																																																																																																																																																												
渡辺 政弥																																																																																																																																																												
加山 秀剛																																																																																																																																																												
評議員	浅見 俊雄																																																																																																																																																											
	柳 敏晴																																																																																																																																																											
	伊坂 忠夫																																																																																																																																																											
	伊藤 宏																																																																																																																																																											
	小松 一憲																																																																																																																																																											
	勝田 隆																																																																																																																																																											
	鈴木 大地																																																																																																																																																											
	平 忠彦																																																																																																																																																											
	戸上 常司																																																																																																																																																											
	宮尾 博保																																																																																																																																																											
	大坪 豊生																																																																																																																																																											
	武井 一浩																																																																																																																																																											
	鈴木 正人																																																																																																																																																											
	柳澤 伯夫																																																																																																																																																											
	塩谷 立																																																																																																																																																											
岡崎 助一																																																																																																																																																												
書馬 輝夫																																																																																																																																																												
書馬 明																																																																																																																																																												
戸田 邦司																																																																																																																																																												
古橋 廣之進																																																																																																																																																												
梶川 隆																																																																																																																																																												
柳 弘之																																																																																																																																																												
清水 紀彦																																																																																																																																																												
西山 正樹																																																																																																																																																												
速藤 功																																																																																																																																																												
評議員選定委員	田宮 紳司																																																																																																																																																											
	福家 辰夫																																																																																																																																																											
	鈴木 克己																																																																																																																																																											
	大坪 豊生																																																																																																																																																											
	清水 紀彦																																																																																																																																																											
加山 秀剛																																																																																																																																																												
柳 弘之																																																																																																																																																												
速藤 功																																																																																																																																																												
事務局長	岸川 善次郎																																																																																																																																																											
杉本 典彦																																																																																																																																																												
大庭 義隆																																																																																																																																																												
事務局職員	小島 宏史																																																																																																																																																											
	河邊 幸司																																																																																																																																																											
	福原 敏行																																																																																																																																																											
	大邊 了司																																																																																																																																																											
	尾関 雅之																																																																																																																																																											
	望月 利明																																																																																																																																																											
	石塚 晋																																																																																																																																																											
	山本 純生																																																																																																																																																											
	尾鍋 文光																																																																																																																																																											
	箱守 康之																																																																																																																																																											
平塚 百合香																																																																																																																																																												
村田 互																																																																																																																																																												
野本 達夫																																																																																																																																																												
杉本 典彦																																																																																																																																																												
岸川 善次郎																																																																																																																																																												
小野 誠次																																																																																																																																																												
大庭 義隆																																																																																																																																																												
杉本 典彦																																																																																																																																																												
取引先	栗田 友春																																																																																																																																																											
	澤柳 恵子																																																																																																																																																											
	鈴木 由利子																																																																																																																																																											
玄(株)、(有)ハンズオン グローバル ブランド アクティベーションズ、(株)スタジオコバ、(株)クレタ、共同PR(株)、(有)オンサイト、(株)GKダイナミックス、内藤陽子、他 運営スタッフ																																																																																																																																																												

■スポーツチャレンジ助成／ジュニアヨットスクール葉山／スポーツ教材の提供／調査研究

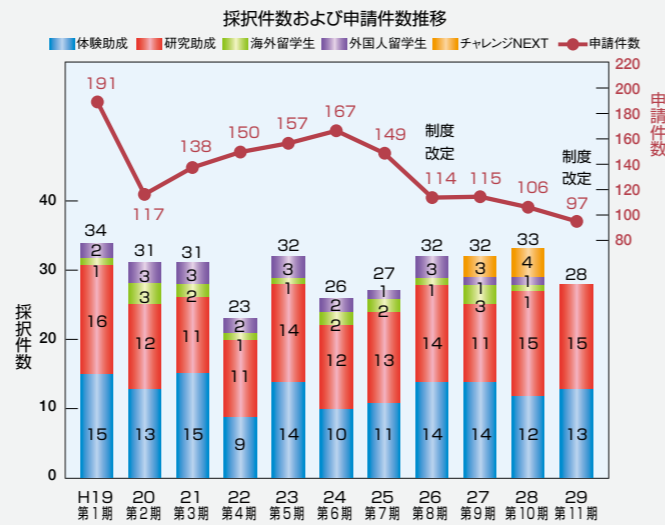
敬称略

事業	役職名	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年
		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	
スポーツチャレンジ助成 ※スポーツチャレンジ選考委員兼任	審査委員長		浅見 俊雄										
	体験審査委員		宮尾 博保 岸川 善次郎 今給黎 敦子 村田 亙		大坪 豊生								
					西田 善夫 ヨーコ セッターランド					杉本 龍男 丸山 弘道			
												小島 智子	
ジュニアヨットスクール葉山	校長		箱守 康之										
	ヘッドコーチ		湯原 浩一										
	コーチ		鎌田 祥一 栗田 栄一郎 町田 和彦 元 憲幸	藤野 恵梨香 上野 太郎 白澤 浩太 野田 宗之介	金森 大 竹内 健一 佐藤 結香 松本 健司 上松 康生 清水 大真 竹腰 真紀子	田原 淳子 小西 由里子 衛藤 隆 逸藤 保子 川上 泰雄 定本 朋子 山本 裕二	富谷 龍樹 飛内 航太	千足 菜穂 市川 愛 戸谷 崇 野村 浩 彦坂 俊博 向後 健大	鈴木 晴香 日隈 佑治 安藤 嶺 水野 元晴 原田 龍之介 長谷 美和子 柴田 敦子	北原 涼平 齊藤 浩二 木下 隆介 小池 哲生 石上 潔 竹内 菜穂 深沢 瑛里 若林 友世 井上 寛子 富部 柚三子			
セーリングチャレンジカップ IN浜名湖		NPO法人 静岡県セーリング連盟会長 荒田 忠典 NPO法人 静岡県セーリング連盟理事長 中島 浩二郎、他 運営スタッフ 中島 豊敏、他 運営スタッフ											
スポーツ教材の提供	抽選者	浅見 俊雄 岡崎 助一											
全国児童 水辺の風景画コンテスト	審査委員長	(一社)創元会 服部 謙司											
	審査員	文部科学省 国土交通省 環境省 農林水産省 (社)フィッシュアリーナ協会 (一社)マリンスポーツ協会 (公)日本ユネスコ協会連盟 (一社)日本マリーナ・ビーチ協会 NPO法人ジャパンゲームフィッシュ協会 NPOワールドチルドレンズファンドジャパン (独法)国立青少年教育振興機構 静岡産業大学 ヤマハ発動機(株) (公財)ヤマハ発動機スポーツ振興財団	山中和之 小山 彰 辻 恵一 高吉 真吾 浜崎 宏正 秦 英樹 釣谷 康	福田 功 今井 孝 嶋野 弘毅 尼子 美博	小野 保 角 浩美 宇賀神 義宣	成瀬 英治 須藤 伸一 石井 馨	池田 慎一郎 池田 リカ 佐野 文敏	佐川 雅悦 宇賀神 義宣	佐藤 克子 柳瀬 知之	久保 まり 間瀬 雅晴 吉海 浩一郎	湯澤 麻紀子 岡野 貴史 久米 英行 田中 健治	国広 富之 佐々木 宏	
			橋川 隆 服部 善郎 賀陽 輝代	内田 眞部 向江 政秋 岡田 正文	内田 眞部 拓殖 則孝	小出 寛治 山下 雅人	間瀬 雅晴 吉海 浩一郎	谷山 晋					
			荒田 忠典 笹川 壮一 長谷川 至	大坪 豊生 鈴木 正典	岸川 善次郎 杉本 典彦								
調査研究	担当理事	浅見 俊雄											
	委員長	海老原 修											
	委員	藤田 紀昭 齊藤 まゆみ 進谷 茂樹 中森 邦男 高橋 義雄											
		河西 正博 岡本 純也 田中 暢子 難波 真理 中村 英仁 小瀬 和也 澤井 和彦 浦田 龍治											

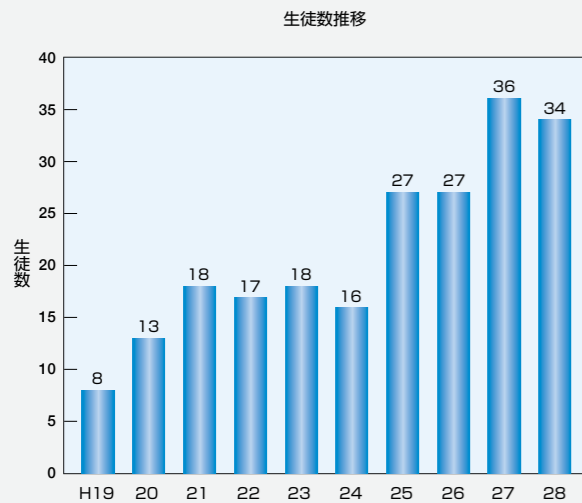
10年の歩み——その成果と課題をあらためて振り返り、共感の輪を広げたい

数字で見るYMFSの10年 事業活動推移

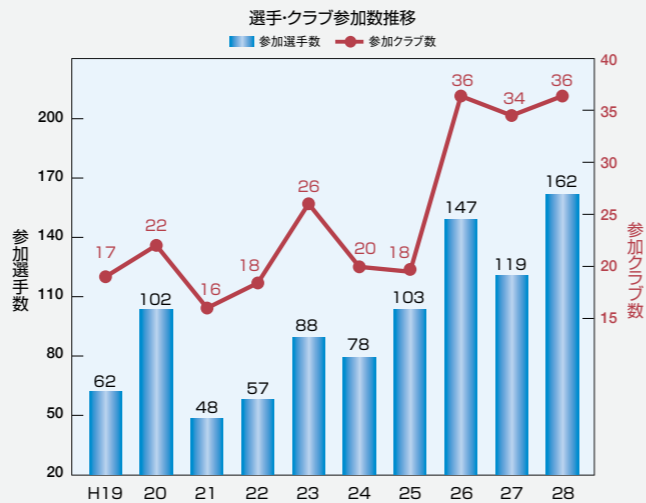
●スポーツチャレンジ助成



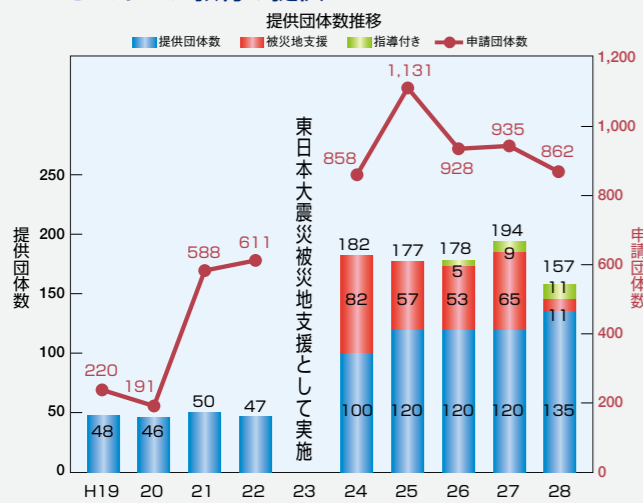
●ジュニアヨットスクール葉山



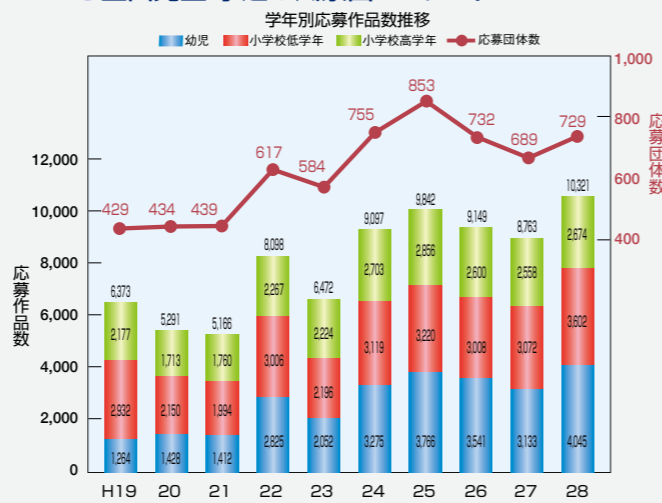
●セーリング・チャレンジカップ IN 浜名湖



●スポーツ教材の提供



●全国児童 水辺の風景画コンテスト



2006年秋に手探りで活動を始めた当財団もお陰さまで10年の節目を迎えることが出来ました。これも、これまで多岐にわたり活動を支援してくださいました多くの関係者の皆様のお陰であり感謝の気持ちで一杯です。深くお礼申し上げます。

当財団は、「スポーツを通じて、夢の実現にチャレンジする人を応援する」をスローガンとして事業を行なっておりますが、これらの活動のなかで共通して出会うのが「たくさん笑顔」と「ひたむきな姿」です。

笑顔は、明るく楽しむ仲間の輪を広げますし、ひたむきな姿は、多くの人にもうちょっと頑張ろうという前向きな気持ちを思い起こさせてくれます。子どもたちや指導者、アスリートや研究者など、幅広く多くの方が関わる当財団の事業において、この笑顔とひたむきは活動の原動力であり、今後も大切にしていきたいと思っております。

また、活動の現場で起きていること、その現場から見えてくることは、次の活動へのヒントがたくさん隠れています。現地に行って、見て、感じ、現場のお役に立てるアウトプットとして次につなげるという現場起点の活動は、民間企業を母体として生まれた当財団のDNAとして引き継いで参ります。

そしてこれらの活動の輪を、手から手へあるいは口伝えに広げより多くの方に参加していただくこと、そしてその活動や理念に共感していただける人の輪を地道にコツコツと広げていくことが、一過性に終わらないスポーツ振興につながると考えます。

次世代を担う子どもたちにより多くの経験をしてもらう「体験事業」、世界にはばたく若いアスリートや研究者を支援する「助成事業」、スポーツを下支えされた方の表彰や現場の役に立つ調査研究を通じた社会発信を行なう「啓発事業」、この3つの事業を通してさらに共感の輪を広げて行くことで、「だれもがスポーツに親しみ、チャレンジと活力に満ちた社会」の実現に努力してまいります。

10年目という節目にバトンを預かり、次の10年へのスタートを切るこのタイミングに仕事できることの喜びと責任を感じつつ、挑戦する姿勢が共感・称賛される社会作りにも貢献できるよう、精一杯走り続けたいと思っております。これからも引き続きご支援、ご指導いただけますようお願いいたします。

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団 事務局長 大庭 義隆

スポーツによる活力ある社会づくり
「スポーツのもつ多面的な価値・有用性を発信!」

心身ともに健全な子どもたちの育成
「子どもたちのスポーツの現場により近く!」

スポーツ
チャレンジ
啓発

スポーツ
チャレンジ
体験

Activate with Sports

スポーツを通じて、夢の実現にチャレンジする人を応援します

スポーツ
チャレンジ
助成

世界にはばたく逞しい人材の育成
「オリジナリティを磨き、より活性化し、進化したプログラムへ」

公益財団法人
ヤマハ発動機スポーツ振興財団
Yamaha Motor Foundation for Sports